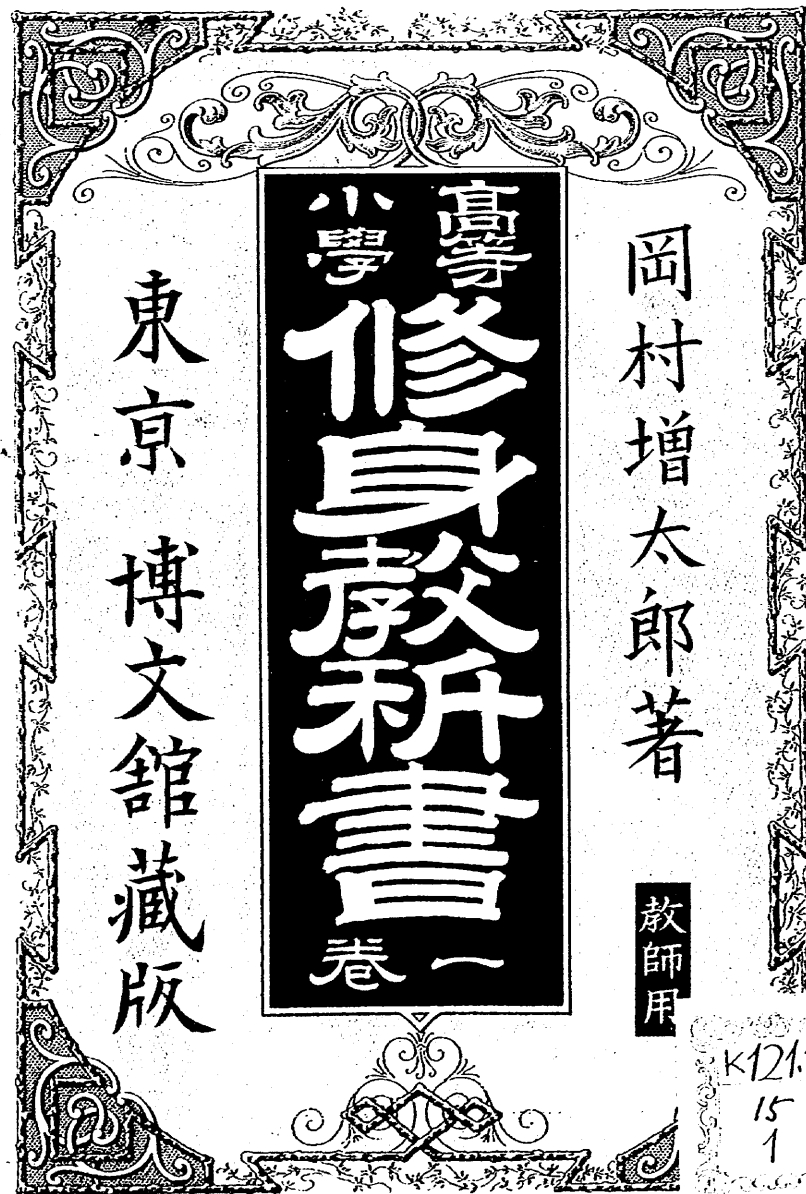




K121.1

15

1

一條 瑛五郎

岡村増太郎編

教師用



高等
修身教科書

一卷

東京 博文館藏版

一修
五



卷之四

高等小學修身教科書教師用第一卷目次

孝行	一
友愛	五
交友	七
信義	一〇
謙遜	一四
廉潔	一七
節制	二一
改過	二四
勤學	二七
禮敬	三〇
戒慎	三三
自助	三五
立志	四〇
治產	四三

交際	四八
方正	五二
忍耐	五五
公平	五九
敬師	六一
攝生	六四
信義	六七
勤勉	六九
忠節	七二
習慣	七四
友愛	七七
孝行	七九
愛國	八五
尊王	八八
節儉	九二
博愛	九五

交友	九八
謹慎	一〇〇
武勇	一〇三
貞淑	一〇六
長上	一〇九
節義	一一一
治產	一一七
孝行	一二〇
禮敬	一二三
交友	一二七
貞淑	一二九
謹慎	一三二
正直	一三五
惜陰	一三八
博愛	一四二
寬大	一四四

溫和	一四八
剛勇	一五一
公益	一五四
節儉	一五八
勤學	一六一
遵法	一六四
尊王	一六七
報恩	一七一
友愛	一七四
剛毅	一七九

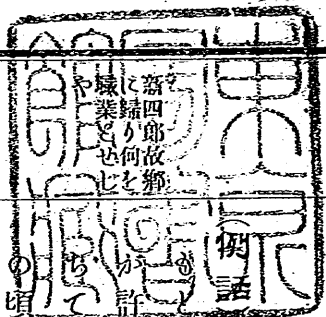
高等修身教科書教師用第一卷目次終

高等 修身教科書 高等科第一級 教師用

岡村増太郎編

孝行

新四郎



近江國坂田郡國友村に新四郎といふ農民あり、家貧を以て他國へ行きて奉公し、母をば兄新七に養ひける、後新四郎故郷に歸り、眞鍮細工の術を以てかすかに生計を立て、母を我が家に迎へ取りしに、其頃米價殊に高かりければ、母の聞きて心を痛めんことを憂ひ、あたりの人より米の價を母に告げざる様たのみけり、母甘き味を好みけるが、晝は家業の暇なき故、毎夜一里ばかり隔りたる長濱に行きて、餅饅頭の類を求めて進め

母の風呂に
入りし後新
四郎は如何
に暖めし
ぞ衣を暖めし

けり、或る時長濱の饅頭、米原より味劣れりと云ひけき
は、道の程三里餘なる米原、夜をどに行きて買ひ來きり、
母又茶を好みぬれば、妻と共に曉に煎じて、其の目さむる
をまちて之を進め、風呂に入れ、新四郎其の衣を肌にて
暖め、夏は日でと、再髪を梳り湯あみさせ、又寺詣でせん
と云へ、雨の朝雪の夕もいとほす、之を負ひ行かざるこ
となし、母いさゝかの賃錢を取りて、芋をうみけるが、年老
いて其の紡み方あらく、賃錢も賤しうりしかば、私に吾が
錢をたして老の心を悦ばせけり、この篤孝領主松平甲斐
守に聞え、褒美として米を賜ひ、は享保十七年十月の事
なりしとぞ。

(格言) 子たるもの父母の身を孝養すとも、其の心を

安せざるは、大なる不孝と謂ふべし。(六諭衍義)

(教授要旨)

- (一) 父母に事ふるには、たゞ衣服飲食の其の意に適はんことを力ひるゝ止らず、能く其の心を慰めんことを旨とすべきこと。
- (二) 父母の憂を以ちて己の憂となし、父母の喜を以ちて己の喜となし、孝道の至れるものあること。
- (三) たゞ衣服の末に於きて養を飲かざるも、其の心を安せざるるときは、不孝とあること。

(教授方法)

詳に事實を説きて生徒の感動を惹起し、格言によりて之を歸納し、更に心を養ふ、孝道の至れるものなる理を説きて、生徒の思想を確むるを要す。

(問詞)

(一) 新四郎が米價を、母に知らしめざりし心は如何。

(二) 新四郎は如何に心をつくして、母の好味をすゝめしか。

(三) 新四郎もし母に芋を、うひの勞を取らしめざりしとせば如何。

(應用問詞)

(一) 父母もし汝等が甚しく勉強するを見て、其の病の發せんことを患ひ玉は、汝等如何にせんとするか。

(二) 雪の夜や、我もねられず、母のせきどは如何ある意味か。

(書取題案)

(一) □タルモノ□□ノ□チ□□ストモ□ノ□チ□セザルハ□ナル□□

ト□フベシ

(二) □□の□□に□きことあり

(作文題案)

(一) 子たるの道

(二) 新四郎の孝行

友愛

何故に四人
せんことを
求めしと思ふぞ

人を正さん
と欲せば先
如何にすべきか

(例話)

支那漢の代に、繆彤といへる人あり、少きとき父を喪ひ、兄弟四人一家の中にて暮らけり、既にして四人の者各妻をめとりしが、折々違言ありて果に各家産を分ちて別居せんことを求めけり、加之はく、鬩ぎ争ふことの絶えざりけきは、繆彤は深く嘆じて一室の内は籠り、自其の身を擲ちて曰、繆彤汝聖人の道を學び身を修め行を謹みて、將に世の風俗をも正さんとするにいらんぞ、其の家を齊ふること能はざるや、と諸の弟及諸婦これをき、悉己の非を悔いて罪を謝し、遂に一家の中和ぎ睦しくなむ

りとぞ。

(格言) 兄は弟を愛し、言ふ所行ふ所、弟の手本となる

やう睦しく教ふべし。(日新館童子訓)

(教授要旨)

- (一) 兄弟は相互に親愛して、假にも争ひ闘ぐことあるべからざることを。
- (二) 別して兄弟たるものは、弟妹を愛し、其の言行、模範とあるべきやうにすべきこと。

(問詞)

- (一) 兄弟諸婦相和せざりしとき、繆疹の如何なせしぞ。
- (二) 繆疹の自責むるを見て、諸弟諸婦の、如何なりしか。
- (三) 繆疹の、何故に諸弟諸婦等を責めずして、自責めたるか。

(應用問詞)

- (一) 汝等の弟若汝等の意は逆ひなば、汝等は之を如何にするか。

松平康重は
何れの城を
守りしや

交友

(例話)

松平康重、かつて徳川氏の命により、信州諏訪原の城を守る時に、甲斐の兵大舉して來り攻め、康重の軍利を

- (二) 弟の兄に對するの道は、如何。

- (三) 兄の弟に對する道を問ふ。

(書取題案)

- (一) □□の□と其の□□は□を□きて□□の□を□□□をわびて□の□くよ□□せり

- (二) 兄○弟○愛○言○所行○所弟○□□○○○○○睦○○教○○○

(作文題案)

- (一) 兄弟姉妹の義務

- (二) 友愛とい如何

治太夫の何
故に自發し
たりといひ
ざるか

失ひ、殿戦して退く、康重の臣に山内治太夫なる者あり、射術の達人なり、此の日矢を射盡してまた一矢を餘さず、敵兵山縣源四郎等之を追ふこと甚急なり、進士清三郎なるもの一矢を治太夫に與ふ、治太夫止り射て一兵の胸を洞して矢松樹にたつ、敵乃引き去る、山縣其の矢を康重に送りて曰、無雙の善射なりと、康重矢を檢するに、清三郎の姓名を刻す、よりて之を褒せんと欲す、清三郎曰、是治太夫が發する所なりと、山内を召して之を問ふ、曰、清三郎が發する所なりと、二人相譲りて決せず、康重并に二人を賞す、時人稱して今の孟之反となせり。

(格言) 朋友の間、禮義厚ければ争ふし、争は凡べて禮義なきより生ず。(慎思錄)

(教授要旨)

- (一) 凡争ひ、利己心の甚強きより起るものなれば、此の心を抑制する、則争を塞ぐの道あること。
- (二) 此の心を抑制せんには、禮義を守るを要すること。
- (三) 禮義は厚く、互に相譲るときは、決して争ひなきに至ること。
- (四) 通常人の間に於きても然らざるべからず、殊に朋友の間に於きては、此の事極めて肝要あること。

(問詞)

- (一) 清三郎が一矢を治太夫に與へざりせば、如何。
- (二) 治太夫及清三郎は康重に對し何と云ひたりや。
- (三) 二人が相譲りたる結果は、如何なりしか、若相譲らざりせば、如何なるべきぞ。

(作文題案)

- (一) 朋友の義務

- (一) 朋友相信とは如何
 (三) 山内治大夫と進士清三郎との通讓

信義

(例話) 高山彦九郎は上野の人なり、其の友人に江上關龍

といふ人あり、關龍は江戸の劍客にて二人の交誼極めて厚かりき、天明の末年に方り關東諸國大に饑ゑて所在盜賊起り、上野の諸郡も亦穩ならず、良民の害を被ること尠からず、彦九郎江戸にありて此の事を聞き謂らく、吾が郷國をしてかゝる不良の事あらむべからずと、即往きて之を鎮めんと欲し別を關龍に告ぐ、關龍之を援けんとせむかと、彦九郎謝して肯はず、單身國に歸れり、路板橋宿に

高山彦九郎
 と江上關龍
 との交誼は
 如何

汝等關龍は
 何のために
 此處にあり
 と思ふや

至る時夜まさに半ならんとす、偶二人の男子あり橋上に臥す、橋狹きが故に踢まされは行くを能はず、しむし躊躇せしが公道を塞ぎて旅人を妨ぐるは曲かれにありと、直に彼等が頭をふみて過ぐ、其の人蹶起し刀を抜きて追撃す、彦九郎顧みて之を睨し大喝一聲したれば、其の人辟易して退きける、彦九郎は路を急ぎて行くほど、路傍の旅店に人あまた憩へり、ふと之を見れば江上關龍其の門弟等の一群なり、彦九郎驚き訝りて其の子細を尋ねれば、關龍曰、友の義に勇むを見捨てかね途を異にして先往き、爲す所あらんとせしに、盜賊早くも己に平ぎたるにより歸り來れるなりと、彦九郎深く其の厚義を謝し、遂に相携へて江戸に還りけり。

(格言) 朋友に交るには、唯偽なくして、信義を以ちてすれば、永交を全くす。(林友直)

(教授要旨)

- (一) 朋友の交は信を以ちて始めて保ちうべし、若信義あくんば、決して其の交誼を、永續する能はざること。
- (二) 患難相助け、吉凶相慶吊するは、朋友の常道なり、故に其の友の禍福を見ること、猶己の身に於けるが如くすべきこと。

(問詞)

- (一) 彦九郎郷國に歸らんとせしとき、關龍は如何せしか。
- (二) 關龍其の後如何あることをなししか。

(應用問詞)

- (一) 汝等友人が他の惡しき兒童のために、虐待さるゝを見れば、如何にせんとするか。

- (二) 汝の友人が、六ヶ敷問題のため、痛心しつゝあるを見れば、如何にせんとするか。

(教授方法)

信義は他人に對し社會に對する至要至重の義務あり、然れども朋友は他人に比し社會より比し、特別に親厚なるものなれば、之に對して信義を守ることも、亦特に厚からざるべからざることより、事實に説き入り、實踐躬行を勧誘奨励しつゝ、格言を以ちて之を確むべし。

(書取題案)

左の句を假名にて綴り、漢字交りに書取らしむべし。

- (一) 天明の頃きさんにて盜賊起りけるが高山彦九郎は之を制せんとて郷里に歸りけり
- (二) 朋友に交るに唯偽なくして信義を以ちてすれば永交を全くす

(作文題案)

左の假名がきのものを文に綴らしむべし

(一) アトサキノ、カンガヘ、ナシニ、ムヤミニ、シヤベルト、ワレシラズ、ウソチ、
イフコトガ、アリマス。

(二) 信義とい如何

謙遜

(例話) 天明中京都に有名なる畫家あり、圓山、應舉と云ふ、
初め其の鶏を描くや、自謂へらく、飲啄鳴叫の狀、振翮修羽
の態、既に眞に逼るを得たり、但其の風神氣骨、天氣活潑の
妙、未其の精を盡さずと、乃日に祇園詞に至り、鶏の群を
なすものを視、凝立して動かず、人以ちて痴呆となす、應舉
以ちて意となさず、此の如くする者年あり、一日恍然とし
て悟る所あり、因て衝立し之を寫す、神采生動し眞物と分
たず、乃ち之を祇園に献ず、見るもの皆其の巧妙を驚歎せ

應舉何故に
かいること
をなすと思
ふや

賣蔬翁は何
ぞ獨語せし
や

ざるはあし、應舉なす此の畫、就きて人々の批評を聽か
んと欲し、門生をして日に祇園祠に至り評者を競はしむ、
觀るもの唯其の妙技を感ずるのみ、一日賣蔬翁あり、之を
望みて佇立すること少時、獨語して曰、鶏の傍し草を描か
ざりし、最可なりと、其の去るに及び門生尾して往く、東
洞院に至りて一門道に入る、門生歸りて此の事を語る、應
舉翌日酒肴を携へ翁の家を訪ひ懇に教誨を乞ふ、翁曰、吾
畫を知るものにあらずといへども、嘗雞を畜養せしに羽
色の四時に變ずることを記憶せり、足下の描きたるハ冬
の羽色にして、殊に精妙ありしかば、其の傍に草を描がき
ざりしを歎賞し、覺えず獨語せしのみといひしとぞ。

(格言) 自滿たざるものは、益を受け、自足れりとせざ

るものは聞博くす。(願休集)

(教授要旨)

- (一) 自足れりと思せず、益勉めて怠らざれば、其の業愈精なること。
 - (二) 如何ある人にも、荷師とすべきことあらば、己を屈して教を聞くべきこと。
 - (三) 一旦自滿の心生するときは、其の業決して進達せざることを。
 - (四) 博く人に聞くを以ちて、恥とあすべからざることを。
- (問詞)
- (一) 應舉が書に熱心なりしことを語れ。
 - (二) 應舉は賣蔬翁によりて、如何なる智識を得たるか。
 - (三) 賣蔬翁は固より不文不學の田舍翁あり、應舉は有名なる一大書家にして、荷之に聽かんとせしは何故ぞ。
 - (四) 一丁字をも知らざるものが時として名家の参考となるべきことを。

言ひ得るものは、何によると思ふぞ。

(應用問詞)

- (一) 汝等もし級の首位に上りたりと思ひて、慢心を生ずることあらば、次の試験には、如何なる結果を來すべきか。
- (二) 農事に付きて、汝等と農夫と何れが明かりや、工事に付きて、汝等と工匠と何れが精しきや、之を農夫に問ひ、之を工匠に問はば、汝等の耻とあるべきか。
- (三) 問ふは一時の恥、問はぬは末代の恥といふ諺あり、其の意義如何。

(作文題案)

- (一) 自慢、高慢、馬鹿の中との意味を綴れ。
- (二) 謙遜の解を文に綴れ。
- (三) 圓山應舉の熱心。

廉潔

小嶋蕉園の
人となり
を問ふ

(例話) 小嶋蕉園は江戸の人あり、清廉にして治民の才あり、菅田安侯の税官となり、甲斐は之く、甲斐の俗治め難しと稱す、蕉園精を勵まして治を講じ、未數歳ならずして徳化大に至り、人稱して神明となす、後職を辭して江戸は還り醫を學び本郷に僑居す、屋宇矮陋僅し、風雨を蔽ふのみ、甲斐の人相語りて曰、吾が輩の今日あるは小嶋君の恵に賴れり、然るに頃日、貧窶極れりと聞く、こゝ宜しく報ゆべきの時なりと、甲斐へ乙和と立どころに百金を得たり、乃舊識の者三人をして江戸に至り之を遣らしむ、三人其の居を訪ふ、蕉園偶あらず、母深く其の厚誼を謝して曰、兒が性狷介にして人の恵を受くるを好まず、然れども今あらざれば吾假し藏して其の還るを待たん、願くは再訪ひ給

蕉園之を受
くべきか如
何

小嶋蕉園の
母は金を取
るに否に
於きて何と
云ひしぞ

へと、三人辭して去る、蕉園歸りて之をき、嗟歎して曰、方今人情輕薄、德義地を掃ふ、而して彼誼を執ること此の如し、然れども我一物をも民に受くることを欲せず、況や百金をや尊慮果して如何と、母曰、吾亦其の然るを知る、たゞ直に之を卻くるは其の厚意を傷るに似たり、故に權りに取めたるのみと、蕉園大に喜び酒肴を備へて其の來るを待つ、既にして三人來り膝行して恩を謝す、蕉園も亦之を慰勞して共に往事を語り、飲食を侑む、蕉園乃容を改めて曰、君等舊好を忘れず來りて我が窮乏を補はんとす、其の厚誼喻ふるに物なり、然れども嚮に施行せし所は公命にして私恵にあらず、左きば私に報ゆる義なく、又私に受くるの理なし、我貧なりといへども藥を賣りて生を計る、母も

甲斐の人民
が小鶴蕉園
に金を納め
ざるにや
如何せしぞ

亦貧に安ず、君等歸郷の日よく我がため衆に謝せよと、彼の百金を還す三人驚き反覆之を納めんことを請へども、蕉園固く辞して受けず、三人みな其の高潔を感じ遂に金を懷にして去る、既に歸りて衆を集め其の情狀を告ぐ、皆感激して泣かざるゝなと、因りて其の金を以ちて生祠を建て永く之を祠せりとぞ。

(格言) 我が義にあらざれば、錙銖も視ることなかられ。(幼儀雜箴)

(教授要旨)

- (一) 受くべき理由あるにあらざれば、一物といへども之を取るべからざることを。
- (二) たゞ他人の好意に出づるものと雖、其の道にあらざれば、之れ受く

べからざることを。

- (三) 究迫の時に際しては、清廉の操を破り易きものなれば、士たるもの卓然として、其の行を完くすべきこと。

(問詞)

- (一) 蕉園甲州にありての活潑は、如何。
- (二) 東都に歸りてのち生計の狀如何。
- (三) 甲州の人、金を饋りしとき、何といひて之を辞せしか。
- (四) 蕉園此の金を受くるゝ道は、背くや否や。
- (五) 甲州の人々、この金を以ちて、如何なることをなましか。

(作文題案)

- (一) 廉潔と貪欲との區別

節制

(例話) 上杉治憲鷹山と號す米澤の藩主なり、其の封を襲

上杉憲山公
の衣食は如何

ぐや節儉を行はんと欲し、身棉布を着膳を定めて一汁一菜となし、羣下に令じて衣服内外みな棉布を用ひしむ、然るに風俗久しく奢侈に染み外班諸臣多く従はず、治憲之を憂ひて曰、吾棉布を衣るといへども、徒ら外に襲ふのみにして内は則縑布なり、外臣の服せざるを亦宜ならずやと、乃盡更めて棉衣となす、是より後令せずして自代れり。

(格言) 一分の奢侈を去れば、便一分の罪過を少く

す。(寒松堂集)

(教授要旨)

- (一) 奢りは身を滅し家を亡すの基なれば、深く慎み戒めて、之を禁絶すべきこと。
- (二) 奢り慣るれば、また改むること極めて難ければ、最初めを慎むべきこと。

こと。

- (三) 奢りの長じたるだけ罪過長じ、奢りの減じたるだけ罪過の減することなれば、時々刻々注意して、奢侈を去らんことを勉むべきこと。

(問詞)

- (一) 治憲の身分を、語れ。
- (二) 如何にして、群下の奢侈を、止めしか。
- (三) 上杉治憲は、諸臣の従はざるを憂ひて、何と云はれしか。

(應用問詞)

- (一) 篤實質素なるは富榮の本なり、とは如何。
- (二) 身を守るの方、節儉を要とぞ、とは如何。
- (三) 真田昌幸、節儉の事蹟を、はなせ。

(書取題案)

- (一) □□ノ□□ヲ□レバ□□□□ノ□□ヲ□シス
- (二) ツチニセツケンチ、オコチヒ、ミコハ、メンゾナツケ、ゼンハ、イナジフ、イ

ツサイナリ、を漢字交りに書きなほせ

(作文題案)

- (一) 節儉と吝嗇との區別を記せ
- (二) 節制の意解をなせ

改過

中川儀右衛門の罪を赦されるか

(例話) 中川儀右衛門は山城の人なり、若年の頃放蕩無頼にして罪に觸れ、追放の刑に處せらる、のち過を悔い行を改めしによりて其の罪を赦さる、是より正直の業を營みて、世に立たんとするの念を發したり、文政の初、江戸に來り紙類を鬻ぐことを務めしに、商業次第に繁榮して一の富商となれり、儀右衛門頗才智ありて、人の考へ及ばざることを考へ出し、世に棄れたるものを利用せんと思ひ、文

中川儀右衛門の何年何歳に於て死せしか

化の初和唐紙を製することを發明し、專世に行ひ、又岩石唐紙と稱する壁紙及屏障用紙を漉き始めし、此の人なりといふ、又越後國臭水の石油は、其の性火を引き易く一たび火移れば消ゆることもなく、殊に臭氣甚しければ燈火の用をなさず、儀右衛門百方工夫を凝し、遂に火早き性を去り臭氣を除き、尋常の燈に用ふべき油と其の効を同おからしめたり、其の他發明製作したる所少からず、天保元年六十八歳にして死せり。

(格言) 過ちて能く改むれば、徳以ちて進むべきなり。(尾藤二州)

(教授要旨)

- (一) 如何なる人も過ちきこと能はず、たゞ過を知りて之を改むべきこと。

(二) 過あるを知りて之を改めざるは謂はゆる自暴自棄にして、最賤むべきの極なること。

(三) 悔悟改心したる上は、また其の過に陥らざらん様つとむべきこと。

(問詞)

(一) 儀右衛門は、始め如何なる人なりしか。

(二) 過を改めて後、如何なる事業をなせしやを語れ。

(三) 儀右衛門もし改過せざりせば、如何なることになり果つべきや。

(應用問詞)

(一) 汝等もし過ちて他人の器物など損失したるときは、如何にするや。

(二) 汝等惡しき友に誘はれて惡しき事をせし、既にその宜しからざることを悟りたるときは、如何にせんとするか。

(教授方法)

人過ありたる時、之を改むるに吝あるべからず、世に過を改め善に遷り、名をさせるもの少からざれば、過ありし時は、早く其の非を悟りて、貳

せざるやう注意すべきこと、及人血氣未定らざるるときは、過の出で来るものなれば、長者の教誨は慎みて守らざるべからざることを、事實と格言とに照して教授すべき。

(書取題案)

漢字交りに書取らしむべし

(一) ツチニ、ウガミチ、カヘリミチ、アヤマナチ、シルベシ。

(二) アヤマナチ、アラタメザル、コレチ、アヤマナト、イフ。

(三) アヤマナチ、ヨシ、アラタムレバ、トシ、モナチ、ススムベキナリ。

(作文題案)

(一) 豊島屋某改過のことを記せ

(二) 中村栗園改過の話

(三) 改過遷善の益

勤學

光政幼少
如志此の
きたるを
きたるを
如何ある
覺を起る

(例話) 備前の藩主池田光政幼名を新太郎と稱し、謚して芳烈といふ、其の十四歳のとき、方り終夜寐ねず、咨嗟咏嘆の聲あり、侍臣大に之を憂ひ、其の故を問ふ、光政曰、余年已に十四歳になりたれども、未國家を治むるの道を知らず、他日大國の君となり、人民に臨まざるべからざるを思へば、寒からずして猶栗するの思あり、是吾が寐ねずして思ふ所以なり、然きとも幸にして、今夕初めて發明する所あり、即唯勉めて書を読み、神智を磨くときは、隨ひて治國平天下の大道を覺知するに至らんのみと、侍臣之を聞き、大に感嘆せり、後果して名器とあり、芳名を天下に轟すに至り。

(格言) 吾嘗終日食はず、終夜寝ねず、以ちて思へども

益なし、學ぶに如かざるなり。(論語)

(教授要旨)

- (一) 人心はなほ璞玉の如し、研かざれば、光あし、之を研くは、たい學問を勵むにあること。
- (二) 徒ら考ふるのみにては、決して道を知りうるものゝあらず、學問によりて先賢の善行を見、善言を聞き、始めて道に至るべきこと。

(問詞)

- (一) 光政、幼時夜寐ぬること能はざりしは何故なりしか。
- (二) 光政、如何にせば、國を治めうべしと語りしか。
- (三) 光政、長じて如何なる人となりしか。
- (四) 光政の言葉を、話せ。

(應用問詞)

- (一) 事物の道理は何よりて知ることを得るや。
- (二) 汝等、若書を讀まず、師に就かず、終日終夜端坐して沈思默考するのみ

よて成長の後有用の人となり得べしと思ふか。

(作文題案)

- (一) 學問の利益
- (二) 友人に勤學を勧むる書牘
- (三) 林春齋の勤學

禮敬

(例話)

徳川三代將軍の頃に島田彈正といふ人あり、禮敬の行高き人なり、常に人に語りて曰、人の須臾も禮を忘るべからず、たとひ親しき朋友の處に至りても、禮義を亂さざる様心掛けざるべからず、然らざれば決して其の交を永續するを得ざるべし、左ればとて心に隔てあるべからざるが故に、先禮義正しく慰懃に詞をつかひ、坐につき

あまり押れ
くしくそ
るの不可な
けることを説

てい隨分和ぎ打ち解けて談話すべく、歸る時ハ亦丁寧に禮を述ぶるを要す、是を始終、中の慎み方といふなりと。

(格言)

人に交るに、禮義正しければ、彼我の間、能く親睦することを得べし。(慎思録)

(教授要旨)

- (一) 禮は、人の必履行せざるべからざる所なること。
- (二) 人々交際の間禮なければ、永く交を保つべからざること。
- (三) 然れども、禮義に拘泥し、あまりしかつめらしくするときは、却りて中を隔つるものなり、此の如きは却りて禮に戻るとこそいふべけれ、たゞよく中庸を取るを要とすること。

(問詞)

- (一) 彈正が人へ語りたる大要を、話せ。
- (二) 始中終の慎み方とは、如何ある謂ひなるか。

(應用問詞)

- (一) 朋友に對し、如何にも威儀を嚴正にししかつめらしくするは、果して禮に合ふや否や、若合はずとすれば、其の理由如何。
- (二) 他人の家に至り、茶菓を出さるゝに方り、悉其の菓子を食ひ尽すは、禮に合ふや否や、又少しも之を喫せざるは、禮に合ふや否や。
- (三) 右の場合には、如何にして可なるか。

(教授方法)

人たるもの禮を鄭重になし敬を竭すときは、己も亦禮敬せらるゝに至る、これ自然の道理なれば、常に禮敬を人に失はざるやう注意すべきことを事實と格言とに照し教授すべ。

戒 慎

(例話)

伊藤東涯の弟に夜遊を成すものあり、其の夜外泊

戸外にて何
と大呼せし
や

東涯何と答
ふべきか

して翌朝未明に歸り來るや、東涯の悟る所となり叱責せらるゝことを畏き、何とかして東涯の家にあらざることを案じたり、蓋東涯失火の時屋上に登りて之を望見するを常とす、よりて戸外に大呼して曰、失火あり失火あり、と東涯果して屋上に登る、弟乃知らざるまねして家に入る、此の後夜遊の歸りに此の計を用ふることを屢なり、然れども東涯毎に屋上へ登らざることなり、弟子東涯に告げて曰、是令弟の欺計のみ、先生また登り見ることなかき、東涯曰、吾また是を知れり、然れども、若眞に失火あるとき、虚言なりと思ひて、油斷すべからず、故に毎に登り見るなり、といひしぞ。

(格言)

患は、忽とする所に生じ、禍は細微より起る。

(後漢書)

(教授要旨)

- (一) 諺にも油斷大敵とある如く、患ひすべて忽みするより生ずること。
- (二) 此の患を免かれんことを欲せば、常々細心誠むるを要すること。

(問詞)

- (一) 東涯の弟は如何なることをなしたか。
- (二) 欺かるゝことを知りて、なほ屋上に登りしは、何故なるか。
- (三) 弟子の東涯も、告げし言葉は如何。

(應用問詞)

- (一) 或る人汝も告げて曰、近頃竊盜あり、放火あり、用心せよと、汝等如何するぞ。
- (二) 油斷大敵とは、如何あることを云ひしものなりや。

(書取題案)

- (一) □ハ □ニ □ス □ル □ニ □ヨ □ハ □ヨ □リ □ル
- (二) □□に □□あらん □□を □れて □を □にせずと □ひけり

(作文題案)

- (一) ころばぬさきの杖
- (二) 我が家に戸締の注意を申送る書牘

自助

(例話)

英國スコットランドに、古來有名なる貴族ロベルト、イーンズなるものあり、年十九の時不幸に遭遇し窮乏甚しく、貴族の家を維持すること能はざるに至れり、當時此の國に於きては、貴族の貧困に陥るとき、其の親戚朋友に於きて之を救助するの習慣なりき、然るにロベルトは天性獨立自助の精神に富み、人の助を假ることを屑とせず、自奮ひて曰、我能く吾が心力に依頼して以ちて再家を興すべしと、つらくその業を考ふるに、本貴族の子なれ

汝等をして
若此の場合
に遭遇せし
めは如何な
すか

ロベルト何
故に兵卒と
なりしか

ロベルトは
營長は何と
答へしぞ

バ一の學び得たる職業なし、只兵卒とあらんのみと、乃歩卒の隊伍に加りたり、一日屯營の門を守りたりし時、一貴人あり、營長に面せんとて來り、暫時門際に佇みたるは不圖守門者のロベルトなるを知りたり、されども故に知らざるまねに營長に面するに及びて、戯れて曰、公の威權も亦盛ある哉、かのパロンの貴爵を以ちて門卒に役すると、蓋帝王と雖未あらざる所なりと、その事實を語りければ、營長大に驚き直に代卒を遣じて、ロベルトを招き、其の仔細を尋問せり、ロベルト禮を正しくし、謹みて答へて曰、然り余は元貴族なりしと雖不幸にして破産したり、是に於きて親戚朋友等余を救養せんとせしども、余は人より依りて生を營まんより、寧自舊時の貴きを忘れて、自力

ロベルトは
營長は何と
答へしぞ

自食の人たらんことを欲し、之を辭したり、余今一兵卒の賤き居ると雖、未嘗他人の熱をからされば、其の心は於きて毫も耻づる所なしと、營長之を聞きて深く其の氣象に感服し、凡庸の人にあらざることを察し、命じて當日の番役を免じ、席を設けて厚く之を饗す、且衣匣を解きて數多の美服を出し、意に適するものを撰ばしむ、ロベルト固辭して曰、一卒の身にして何ぞかゝる美服を須ひんと、其の厚志を謝して去れり、是より營長の心にロベルトを愛敬し、幾もなく拔擢して騎兵長に任ず、後産を割き、其の女を以ちて之に妻せり、ロベルト勤勉怠らず、遂に産を興して、舊時の名族に復し、其の初志を遂けたり、其の子數人あり、皆高官に上りしと云ふ。

(格言) 凡子弟たるものは、皆能く自立して、世用を爲

ぜ。(呂東萊)

(教授要旨)

- (一) 獨立自助の精神は、極めて高尚極めて善美なること、并に依頼心の卑屈なること。
- (二) 人は、獨立自營して、何事までも成し得べき能力を、有するものあること。
- (三) 自力よりて爲すことは、確然不拔あれども、他人の力に頼りて爲すことは、往々失敗を免れざること。

(問詞)

- (一) ロベルトの身分及境遇を、語れ。
- (二) ロベルトが、親戚朋友の力によらざりしは、何がためありしか。
- (三) ロベルトが、營長の間に對へし大略を、語るべし。

(四) ロベルトは、一兵卒の賤しき役を勉めながら、何故に自恥とせざりしか。

(五) ロベルトは、遂に如何なることになりしか。

(應用問詞)

- (一) 汝等もし不幸にして貧窮に迫り親戚に富豪ありて養育せんとはいはゞ、汝等は之に従ふや否や。
- (二) 官吏學者、農夫、商賈等諸々の職業の中、貴賤上下の別ありや否や、其の理由を語れ。
- (三) 天は自助くるものを助くとは如何なる意義か。

(教授方法)

自助とは、能く自主自立して他人の力に依頼せず、獨立自治の精神を發揮して、事を成し遂ぐべきことより、ロベルトの獨立自主の精神強盛なるが爲め、廢頓せし家を勃興せしことを、剴切に説き去り、生徒をして自助の精神を興奮せしめ、後格言を意解して之に歸納せよ。

(書取題案)

(一) □□□タルモノハ□□□□□シテ□□□チ□セ

(作文題案)

(一) 依頼心の弊害

(二) 車夫と泥土との話

立 志

(例話)

豊臣秀吉は幼名を日吉といふ、尾張國中村に生る、繼父筑阿彌之を僧となさんと欲し之を一寺に送る、秀吉天資機敏にして誦梵を曉らず、人の來りて武事を談ずることあれば、輒耳を傾けて之を聽き、慨然として曰、大丈夫亂世に生れ安んぞ乞丐の徒となるべけん、と、遊嬉意に任せ僧を以て己を厭はしめんとす、僧遂に秀吉を家へ還す、

秀吉何故に遠俗せしか

日吉丸誰よ
あらざれば
功名を共に
とべからず
といひしぞ

家もと貧しきが故に出で、又奴とある、然きども至る所皆な數月にして去る、尋ぎて松下之綱に事ふ、謂へらく方、今天下織田信長にあらざれば、共に功名を成すに足らずと、乃去りて信長に事ふ、屢奇功あり、深く信長に親任せられ、昇進極めて速なり、後明智光秀信長を弑す、秀吉光秀を誅し、權勢全く秀吉に歸す、後遂に海内を平定し、關白の位に昇り、大閥と稱す、志尙飽らず、大兵を起して朝鮮を攻め、勇名を宇内に轟かせり。

(格言) 志の趣く所は、遠きも達せざるなし、窮山鉅海も、限る能はず、(奮發錄)

(教授要旨)

(一) 如何なる事業も志だにあれば遂けられざることなきこと。

(二) 故に丈夫は、先其の志を立て堅忍して其の目的の方向に進むべきこと。

(三) 人の事を成すに大小あるは、必竟志の大小に外ならざること。

(問詞)

(一) 秀吉は、初め如何なる身分ありしか。

(二) 秀吉にして、もし僧となり終るか、或始終松下に使へたりとせば、其のなす所如何と想像するぞ。

(三) 秀吉の成せし所を語れ。

(教授方法)

事をなさんとするに、先其の志を立て其の目的を定め、己が成し遂げんと欲する事に従ふべし。若然らずして彼に移り此に轉じ、其の目的方向を變ずるときは、一も成就することなし。此の道理を事實と格言とを照合して克く教授すべし。

(應用問詞)

(一) 小野道風の能書家となりし事蹟を語せ。

(二) 山本北山立志の大畧を語れ。

(三) 精神一たび到らば何事か成らざらん、とは如何。

(書取題案)

(一) ロノロクハ口キモクセザルナシ口口口モ口ル口ハズ

(作文題案)

(一) 細川忠利の事を記せ

(二) 朋友が學問の方向を轉ずるを戒むる書牘

(三) 轉ぶ石には苔集らず

治産

惣助の分散
せしは何れ
原因するか

(例話)

筑後國三池郡飯田村惣助といふものあり、明治の初年調賦より追りて家宅其の外みな賣拂ひ、家を分

タキの志を
勵し何を營
業せしや

散したりしに翌年惣助重病に罹れり、惣助の妻をタキといふ、タキ看病の暇に附木を削り、自荷ひて遠く肥後國まで持ち廻り、僅の價を得て活計を營々、只管藥餌介抱に怠りなかりしに、其の効なく遂に惣助身よりぬ、然るに老母ナヨ及幼兒三人にて一家五口、タキ一人の手に頼れ必至の困窮に迫るるを、近隣のもの憐みてまづ雨露を凌ぐばかりの小屋を建て之に佳ましむ、是に於きてタキ志を勵し生魚を鬻ぎて生計を立てんと、七里の遠路を日ごと通ひて、肥後の長洲の海濱に求め、擔ひ歸りて近邊の村々に賣り歩きける、其の居村に歸る所一里にあまざる深山あり、晝に人の稀に往來する所なるに、タキ更に恐じとも思はず、魚を擔ひて夜中も獨行せり、或る時此の山

タキ女値の
高低により
財本を損失
せしときは
如何

タキ女の老
母に事へ幼
兒を撫育せ
る有様を語
る

にて山賊に出で逢ひ既に荷物を奪われんとせしに、タキ聲をたて、同行の人あるまねし、早く來りて救へよと呼はりければ、賊驚きて逃げ去れり、斯る難に遇へども、心力更に撓まず、なほ晝夜を別たすその道を往來し、生魚を賣買すること此に年あり、或時に値の高低ありて財本を損失することあり、去る時はせん方なく鶏鳴より山に入り、枯木落葉を拾ひ之を賣りて糊口の用または財本に充て、またもとの魚を賣買し、勉強精勵すること壯丁の男子も及ばざるばかりなり、かく苦勞を凌ぎて年月を重ね來りしかば、漸利潤をつみて一家の衣食を缺くことなく、老母に事ふるにも、三度の食必一度の口に適するものを備ふるに至り、また幼兒を撫育するにも慈愛を盡して一身の

節操へ更にもいはず、近隣の交誼も厚く、賤婦ながらも斯の如く刻苦して他人の扶助を仰がず、遂に數俵の米を貯蓄し不時の用に充てたるなど、其の心を用ひしこと婦人よはめづらしきものなきは、委しく其のさまを具申して、縣廳に進めたり。

(格言) 一日の飯を喫せば、一日の飯錢を得ることを計るべし、必虚しく費すこと勿れ。(韻休集)

(教授要旨)

- (一) 人は己の身に用ふるだけの物は、必生産せざるべからざる義務あるものなること。
- (二) されば、一飯を食ひ、一衣を穿つにつきても、一飯一衣を産出せることを勉めざるべからざること。
- (三) 如何なる人にて、其の力を盡さば、一身を養ひ一家を立つるを得べきこと。

きこと。

(問詞)

- (一) タキの家は、始め如何なる状ありしか。
- (二) タキは、如何に夫に仕へしか。
- (三) タキが老母幼兒を養ふために艱苦せし有様を語れ。
- (四) タキ、如何にして山賊の難を、まぬがれしか。
- (五) 商賣上損失を來したるときは、如何にして之を償ひしか。
- (六) タキの家は、遂に如何ある、生計の有様となりしか。

(應用問詞)

- (一) 汝等もし家産を蕩盡し、また他に據る所なしとすれば、如何にして身を立てんと思ふや。
- (二) かせぐに追ひつく、貧乏おしとは如何。
- (三) 福運は常に勤勉なる人の側に傍ふこと、恰順風穩波の航海に、巧みなるものゝ随ふが如し、此の意味を語れ。

(教授方法)

世の中の家業はゆだねなき人、

未だのもしきことにありけり。

此の歌意より説き起して治産の事實に説き移り、恒産なきものは恒心なきものなることより産業を治むべき必要を教ふべし。

(書取題案)

(一) □ □ ノ □ □ チ □ セ バ □ □ ノ □ □ チ □ ル コ ト □ □ ル ベ シ □ □ シ ク □ ス コ ト □ レ

(作文題案)

- (一) 勞力は石より麵包を作る
- (二) 稼ぐに追付く貧乏なし

交際

稻葉迂齋の學志すべきを覺りしかの何歳の時

(例話)

稻葉迂齋十三歳のとき三宅尙齋の門人三木信成に見えて、之と近世武將の戦功を談じ、聖賢の道學をさるべからざることを聞き、是より學に志し淺見綱齋の門人、伴部安崇、赤井眞義と經義を講じ、其の教導を承く、後學成り名顯きて老年に至るまで、二子を畏敬すること始めの如し、年賀の禮寒暑の儀に必誠意をいたし、若年の時と異らず、平生人に接するに、短を捨て、長を取り、細過を略して巨節を揚ぐ、當時山宮維深といふものあり、學未醇ならざれども一世の尤物かり、又唐崎彦明といふ者あり、徳未熟せざれども一世の英才なり、二人志高く、氣傲りて諸儒を輕蔑し、自見ること甚高し、然れども迂齋を見るに及びては、皆節を屈して其の寛厚の風あるに敬服す、後弟子

當時の諸儒が山宮唐崎の兩人を忌み、其の故を

の禮を執りて之に師事せしが、後數年にして維深變に死せし。諸儒醜みて顧みず、迂齋奔走して其の妻子を吊ふ、彦明逐ひれしに諸友棄て、訪はず、迂齋財貨を贈りて其の窮を救ふ、其の交友の厚きこと率この類なり。

(格言) 善人を見て之に效ひ、不善人を見て之を改む、

善と不善と、皆吾の師なり、(傳家寶)

(教授要旨)

- (一) 人と交るに、能く心を用ふる時は、皆己の手本とあしうることを。
- (二) 善人と交際しては、其の善言善行を學びて身を益すべく、不善人と交りては、其の言行を見て戒めとなすべきことを。
- (三) 人各長所あり又短所あり、されば其の短をすて、長を取るは交際の要道なり、もし短所あるを以ちて其の人を棄つれば、また交際すべき

人なきに至るべきこと。

(問詞)

- (一) 迂齋は、其の師友に接すること、如何ありしか。
- (二) 他人の省みざる友人に對し、迂齋の交誼如何を語れ。
- (三) 山宮唐崎等は、諸儒を輕蔑せしと拘らず、獨迂齋に敬服せしは何故なりや。

(應用問詞)

- (一) 交際上、心得べき諸點を擧げよ。
- (二) さき折るか、人の言葉の花ざかり、どは何如なることを、戒めしものなりや。
- (三) 他人のこと、我にむかひて、いふ人は、
さこそ我がこと、人にいふらん。

此の歌は交際上如何なることを、いひあらはせしものなりや。

(書取題案)

教師左の句を口誦して書取らしむべし。

- (一) 老年に至るまで寒暑の訪問を闕かず常々之を敬ひ重じけり
- (二) 平生人と接るに短を捨て、長を取り細過を略して、正節を揚げけり
- (三) 善人を見て之に效ひ不善人を見て之を改む善と不善と皆吾が師なり

(作文題案)

- (一) 接客の心得
- (二) 或る人々交際を需むるに其の紹介を依頼する書牘

方正

(例話)

市嶋文通の
人となり
を問ふ

市嶋文通は越後新發田の人なり、家世々商を業とす、人とあり、沉默にして孝友なり、兄弟三人あり文通は仲子なるを以ちて別一家を營む、其の宗家に事ふる最禮敬

市嶋文通病
篤きに方り
隣里相語
りて何と云
ひしぞ

を盡す、風雨寒暑といへども日一必一たび至る、家もと富めども毫も驕傲奢侈の風なく、艱難貧苦のものあれば、之を恤み患を分てり、其の心を持する端直にして事を處する苟せず、もと遊蕩逸樂のものあきば乃色を正して之を誠む、此の如きもの三十餘年終始一日の如し、故を以ちて人畏れて之を愛す、晩年聲譽益起り、領主聞きて之を嘉し、謁を正寢に賜ひ優辭之を賞す、蓋特典なり、又博く學に通じ、窺ひざる所なく、強記にして尤史に精し、又詩文を善くせり、弘化三年没す、年五十四、其の病の篤きに方りて、隣里相語りて曰、壽もと贖ふべくんば、願ひく、人各命の一分を損して以ちて君五六年の期を延ばさんと、以ちて其の徳望を見るに足るなり。

(格言) 心正しからざれば、身修らずして、家を齊へ、

人を治め難し。(天和俗訓)

(教授要旨)

- (一) 心方正あらざれば、其の身修らざること。
- (二) 其の身修らざる程のもの、決て家を齊ふること能はず、まて人を治むることは、思ひもよらざること。
- (三) 其の心方正なれば、人必歸服すること。

(問詞)

- (一) 交通の善行を、語れ。
- (二) 交通の病篤きに方り、人々如何に憂愁せしか。
- (三) かくまで、人に欽慕せられまは、何によると思ふぞ。

(書取題案)

(一) 市島交通〇〇〇つき〇〇まて〇〇〇ふるよ〇〇〇を〇ま

けり

(二) 〇〇〇〇〇の〇と〇〇ふ〇〇れり

(作文題案)

- (一) 市島交通の善行を記せ
- (二) 朋友より忠告せられまを、謝する文

忍耐

(例話) 安井衡息軒と號す、戊辰の亂を避けて鹿濱に寓す

寶藏寺の住職宥應上人、兼てより息軒の大儒たるを聞知し居たれば、一見せんと欲し、大なる紙袋に豆二三升を入きたるを携へ行きて之を訪ふ、息軒出で接す、上人かの豆袋を出して曰、寒村の貧僧珍贄の以ちて先生に呈すべきものなり、こは誠に耻しき品なれども、聊寸志を表するの

宥應上人は
何故に安井
先生に一目を
見せしむるか
欲せん

安井先生の
譬喩を語れ

藥罐の湯の
よみたちと
き安井先生
は如何にせ
られしや

み、枉けて笑納せられよと、息軒大に喜び、それは珍物なり、元
來余は貧書生にして十分の學資もあらざりければ、百事
儉素を主とし、豆を生醬油と塩とにて堅煮とし、常に麥飯
に和して喫せり、特に冬夜の如きは一個の小なる藥罐に
水を入れ、之を行燈に吊懸し、其の底を燈穗に當らしめ、一
に以ちて時計と代用し、一は以ちて夜食の湯と供せり、積
雪石を穿ち、積羽舟を沈むの譬へに漏れず、微々たる燈焰
も久しきを經れば、驚くべきものにて、夜半過ぎに至る時
は、藥罐の水必沸騰するに至る、此の時を定刻として、讀書
を休め、其湯にて煮豆と麥飯とを喫して、寢に就けり、古人
の菜根を咬みて宿志を成す者多しと聞きしが、余が一家
を成せしは皆豆の賜なり、成業後久しく此の佳味に辜

負せり、今や貴贈に接し、眞に舊友に逢ふの心地して、坐に
書生の昔を追懷せりと、語られたりとなん。

〔格言〕 菜根を咬み得て、百事做すべし、〔汪信民〕

〔教授要旨〕

- (一) 艱難辛苦を堪へ忍ぶにあらざれば、如何なる事業も成就すべからざることを。
- (二) 成業の大小の忍耐の如何にあり、即忍ぶこと大なれば、成す所必大なることを。
- (三) 艱苦に際しては、力を奮ひ勇を鼓して之に打ち勝たんことを力むべし、決して畏縮避易すべからざることを。

〔問詞〕

- (一) 息軒苦學の狀を語れ。
- (二) 豆の贈物に對し、息軒の憶ひ起したる感情如何。

(三) 息斬冬夜如何にして湯を煮たるぞ。

(教授方法)

人は事に當りて、忍耐の心なかるべからず、若此の心なきときは、困難ある場合に遭遇し、忽倦怠を生じ、事業を中道に至り、廢するの不幸に陥ることを免れざるあり、克く事實を詳明に説述し、然る後格言を講説して、以ちて百折不撓の精神を、興奮すべし。

(應用問詞)

(一) 石の上にも三年、といへる諺あり、安井先生の事蹟と照合して、説話せよ。

(二) 禍難の一塊は苦痛を覺えしむと雖、實に福慶の積塊なり、とは如何なる意味か。

(書取題案)

(一) 元來貧しき書生なりしかば□□に□しく生□□□は□を□ちて□を□て□に□□に□せて□したり

(二) □□チ□ミ□テ□□□スベシ

(作文題案)

(一) 石の上よも三年

(二) しんぼうは金あり

公 平

板倉周防守
重宗の人と
あり如何

(例話) 周防守板倉重宗京都所司代たり、公廉の聞々高りりき、或る時松原通東の洞院の角屋敷、兩隣より境を争ひて官に訴へたることあり、折節四月の初めなりしかば、一方の訴訟人周防守の宅に越瓜を持ち行きて贈れるに、近日處置すべしとの返答ありければ、賄賂を用ひし驗なりと悦び居たるが、其の日になりて町内のもの並び居たる

中にて、重宗ハ先日ハ珍しき瓜を贈られ満悦せり、さて此の地ハ隣のものをなきは本に返すべしと言ひて歸りたり、其の行かゝる類多かりし故、人皆悦び服せしとぞ。

(格言) 己ハ公あるものは、人ハ公なり、己ハ公ならずして、能く人に公なるはあらず。(周敦頤)

(教授要旨)

- (一) 心を持すること、常に公平にして、苟私あるべからざること。
- (二) 殊に人の上とありてハ、最公平あらざるべからず、然らざれば決して人を治むる能はざること。
- (三) 人の心はもと公あるものかれども、唯利慾の念あるが故に、私曲に陥るものあり、故に須らく先慾心を抑ふべきこと。

(問詞)

- (一) 重家は、如何ある人ありしか。

(二) 越瓜を贈りたるものに、如何ある判決を下せしか。

(應用問詞)

- (一) 公平と不公平との區別を、語れ。
 - (二) 事を處し物に應ずる、己の偏好に徇ふべからずとは如何。
 - (三) 先私心を去りて而して後以ちて、公事を治むべしとは如何ある意ぞ
- (書取題案)
- (一) 清廉にして私あき人あり
 - (二) 己に公あるものは人に公あり己に公あらずして能く人に公あるはあらず

(作文題案)

- (一) 公平

敬師

冉伯牛は何
故に南牖の
下に遷りし
や

(例話)

周の伯牛は姓を冉、名を耕といひ、業を孔子に受けて徳行の稱あり、嘗癩を疾みしかば孔子往きて之を訪ふに、伯牛ハ主君の禮を以ちてその師を尊び、遷りて南牖の下に臥しぬ、是孔子の南面して己を視ることを得しめんとてなり、君が臣の疾を視るより必南面す、孔子その坐に當らずして其の室に入らず、牖より其の手を執りて之と永訣せり、

(格言)

道を教ふる師は其の恩尤重し、君父と同じく

貴ぶべし。(貝原篤信)

(教授要旨)

(一) 師は道を教へ業を授くるものにして、吾人が世に立つを得るは師の恩あること。

(問詞)

- (一) 親には養育の恩あり、君には統治の恩あり、師には教育の恩あり、故に、師は君父と同じく貴ぶべきこと。
- (二) 南面して人を見るは、如何なる禮あるか。
- (三) 孔子は、如何にして伯牛を視られしや。

(教授方法)

師は我に學術を授け智識を興へ品位を附與し、我が生涯幸福とあるべきことを教諭し給ふ、大恩人あれば父母に比しく之を敬ひ之を尊び其の命に能く服従し、其の恩を忘れざるやう心掛くべきことを教ふべし。

(應用問詞)

- (一) ボンヌ氏曰、師は父母に等しく之を敬愛し之に順従して、其の恩を忘れざるべし、と其の意を語れ。
- (二) 師と同道するときは、如何にすべきや。

(三) 師と弟子との問柄は、如何にするを可とするか。

(書取題案)

一〇ナロフルロハロノロロシロトロシロロブベシ

(作文題案)

(一) 師の恩

攝生

(例話)

寺澤廣高は常に攝生の心あつき人なり、毎朝早くより起き出で、終日萬の事を勉め、日暮れてのち、格別の用なければ、夜ふけぬうち、寢所に入るを常とせり、嘗て人に語りて曰、夜は寝ぬべきのときなり、無益の事に夜を深す時、精神疲勞して翌日の勉めを妨ぐるに過ぎず、と

寺澤廣高は召使のものを如何に扱ひしや

其の自守ること此の如くなるが故に、召使の人々にも成るべく早く寐に就かしめたりとぞ。

(格言)

曉は早起を要し、夜は熟睡を要す、並にこれ養生なり。(佐藤一喜)

(教授要旨)

- (一) 睡眠は精神の食物あり、といへる諺の如く、程よく睡眠することは、養生に於きて極めて肝要あること。
- (二) 早く寐ねて早く起くるとは、生理上極めて有益あること。
- (三) 無益に夜ふけまで、長起きするの不可あること。

(問詞)

- (一) 廣高は、如何に起臥せしか。
- (二) 廣高の人に語りたることを、話せ。

(應用問詞)

- (一) 夜早く寝て朝早く起くれば、如何ある利益ありや。
(二) 汝等、夜ふけまで起きたることあらば、其の翌日の氣力の如何ありしか。

(教授方法)

痛き針苦き藥にあつき灸、

くるしまんより、かねてつゝしめ、

長生の願へど朝寐うたゝねに、

年月ちいひ、ひかすゑらずや。

之等の了解し易き歌詞より、身体の健康に注意すべきことを教ふべし。

(書取題案)

(一) □ハ□□ナ□、シ□ハ□□ナ□ス□ニコレ□□ナリ

(作文題案)

(一) 活潑の精神は健康の體に合る

信義

何故に聞か
ざるまねし
て去りしか

三枝勘兵衛
の語をいふ
せ

(例話) 黒田彦左衛門ハ榊原康勝の臣なり、大坂の役彦左衛門一甲士を殲す、其のまさけ之を誡せんとするに當りて、其の友三枝勘兵衛なるものあり來りて其の首級を爭ふ彦左衛門之を委棄して去る、勘兵衛後より之を呼べども聞かざるまねして馳せ去る、又一敵將を撃ちて之を殲す、城陷る偶康勝の病を以ちて卒するに會す、徳川家康、久世廣之、坂部廣勝をして榊原氏家臣の功を論せしむ、勘兵衛首級を呈し二使に謂ひて曰、こゝを黒田彦左衛門が獲る所なり、彼即棄てゝ去る余故に之を拾ふと、二使彦左衛門を召して之を問ふ、對へて曰、知らずと、勘兵衛が曰、子さき

に槍よて此の敵を殪せり、吾後より子と呼ぶ子聞かざるまねして棄て去る、吾子と呼ぶもの十數次子何ぞ之を知らずといふやと、彦左衛門曰、吾竟に知らざるなり、家康之を聞きて深く之を嘉稱す。

(格言) 信は事毎に偽なく、實を以ちて、人に接するを云ふ。(林友直)

(教授要旨)

- (一) 人に交るに、信義あかるべからざること。
- (二) 功あれば之を人に譲り、危きを見ては之を救ひ、過あれば之を誠むべきこと。

(問詞)

- (一) 彦左衛門は、何故に首をすて去りしか。
- (二) 首改めの時、黒田三枝の兩人は、如何あせしか。

(應用問詞)

- (一) 人の功は忌むべからず、とは如何。
- (二) 人と争闘すれば如何なる結果を來すべきか。
- (三) 大樹將軍のことを話せ。

(書取題案)

- (一) □ハ□□ニ□ナク□ナクナテ□ニ□スルナイフ

(作文題案)

- (一) 信義
- (二) 朋友の交

勤勉

(例話) 伊勢國三重郡室山村に伊藤小左衛門といふものあり、家世々農を業とし、傍、味噌、醬油等を醸造す、初め家計

伊藤小左衛門は兄弟何人ありや

家産回復に何年を期せしむ

裕ならず、兄弟四人あり、小左衛門ハ即其の長子なり、四人共に心を同じくし、専家業を勵みしかば、釀造の業大に進み、遂ニ室山味噌の名を成し、販路日に弘れり、安政六年地大に震ひ郡中最甚しく、家屋倉庫みな倒れ之に加ふるに霖雨ありて、貯ふる所の味噌醬油大概腐敗せり、之が爲に産業殆地ニ墜ちんとす、此に於きて兄弟相誓ひ各其の負擔を分ち、三年を期して此の損失を回復せんを謀り、辛苦經營日夜懈らず期に先ちて遂に家屋倉庫を再建し結構却りて舊時に優れり、小左衛門また製茶の利益多きを見て山地に茶を栽培し、又志を蠶業ニ止めて桑を栽ゑ、漸次に製絲場を建て機械を購入し、遂に盛に茶生絲を産出するに至れり、是より細民もまた業を得、一般の利益

となること極めて大なりといふ。

(格言) 少壯の時努力せざれば、老大にして徒に傷悲

す。(古語)

(教授要旨)

- (一) 人各務むべき所あり、必全力を盡して之を勤むべきこと。
- (二) 力を盡して業を勤むれば、衰へたる家も興すべく、貧しき家も富ますべきこと。
- (三) 老後の禍福は少壯の時勤むると否とに因る、故に拮据勉勵して老年の幸福を享くる様つとむべきこと。

(問詞)

- (一) 小左衛門の家は、始め如何ありしか。
- (二) 地震と霖雨のため、蒙りたる損害を、如何にして回復せしか。
- (三) 小左衛門が、起したる事業を、語れ。

(應用問詞)

- (一) 利運は勉強の結果、といへる西諺あり、如何ある意味か。
- (二) 人のねる、そのまに深く耕して、
多く作りて、多く収めよ、との意解を乞ふ。

忠節

(例話)

前田利長の臣に山田勘十郎といふものあり、年十四にして父の讎を報いし人なり、後府庫の管鑰を掌りけるが、適利長命じて急に管鑰を齎らしむるに稍遅りしかば、利長怒りて杖を擧げ之を撃つ流血面に被る、跪きて伏しけるに刀脱して室を出づ、利長益怒り再杖を擧げて撃たんとす、左右諫めて終に止む、勘十郎乃病と稱して引籠りぬ、關原の役起るに及びて、利長躬大聖寺を攻む、時に

山田勘十郎
が父の仇を
報いしは何
歳の時か

前田利長は
勘十郎に何
と云ひしぞ

勘十郎手兵六十騎を率ゐて軍に従ひ先登して創を被る、顧みて従者に命じて曰、吾が命の未絶たざるは方り主公の處に昇きもて往けど、到るゝ及び利長之を見て前の粗暴なりしことを悔い流涕して曰、吾實に汝に負けりと、勘十郎笑を含みて終に瞑せり、時に年二十なりといふ。

(格言) 難に臨まざれば、忠臣の心を見ず。(苦心雜言)

(教授要旨)

- (一) 忠義の臣は、主君のために、其の身命を省みざること。
- (二) 故に一旦急難あるときは、其の節操直に見はるゝこと。
- (三) 忠臣は、既に其の身を主君に奉ずるが故に、如何ある苦楚を嘗むるも、毫も意に介せざること。

(問詞)

- (一) 利長ははじめ如何に勘十郎をあしらひたるか。
- (二) 勘十郎の最後の状を語れ。
- (三) 山田勘十郎は其の從者に如何あることを命せしぞ。
- (四) 前田利長は如何あることを悔いしと思ふぞ。

(應用問詞)

- (一) 忠臣は社稷の衛ありといへる古語あり如何ある意ぞ。
- (二) 大久保彦左衛門の忠義を語せ。

(作文題案)

- (一) 和氣清磨

習 慣

長知目は進
みて如何あ
る官にあり
しや

(例話) 支那宋朝より長知目といふ人あり、始め河陽郡の掌書記たりしが、後進みて宰相となきり、然きども自奉する

或る人の言
葉を云へ

こと質素にして掌書記たりし時と異らず、或る人曰、今公俸祿を受くること少からざるに、かく清約なる何ぞや、却りて外人の誹りを受くるに過ぎざるべし、知目嘆息して、いづく我、我今日厚祿を受く家人をして錦衣玉食せしむるに足れり、然れども人情儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難し、我が今日の俸豈に常にあるべけんや、もし家人をして奢侈に習はしめ一旦我が地位を失ふとあらば、頓に儉約ならんと欲するも得べからず、是故に常に儉に習はしめ以ちて位にあるも位を去るも、身存するも身亡るも、始終一日の如くならしめんとするなりと。

(格言) 人の心はよく移るものなり、然るに賢には移り難く、惡には移り易し。(太政大臣の女臣)

(教授要旨)

(一)人心は、外界の事情に應じて移るものなれども、物理上の情性の如く、その慣るゝ所は容易に移しがたきものあること。

(二)就中惡しき事は、人慾を恣にすることなるが故に、之に従ふは造作もなきことなれども、善事は人慾を抑ふることなれば、之に移るは容易ならざること。

(三)故に常に善き習慣を付け置かざるべからざること。

(四)殊に飲食衣服の類、奢りに習はぬやうせざるべからざること。

(五)習慣となれば善事をあすこと毫も難からざるに至ること。

(問詞)

(一)長知目掌書記より宰相となり、自奉すること如何なりしか。

(二)長知目、或る人の問に何と答へしか。

(三)長知目、もし家人をして奢侈に慣はしめしとせば、不幸にして知目の身に變あらば如何。

友 愛

毛利元就は
何れの地を
攻めしや

(例話)

毛利元就は、山陰山陽十三州を攻略し武威を輝かしたる名將あり、其の將は死せんとするに臨み、諸子を臥床の傍に召し、箭を取ること其子の數と均しくし、之を束ねて力を極めて折らんとするも折るゝ能はず、因りて一條毎に之を折きは輒く折れたり、乃諸子を誡めて曰、兄弟は宛この箭の如し、離るきは折き合へば強し、汝等慎みて父の遺命を忘るゝとなく互に和合して國を保つべしと、第三子小早川隆景進みて曰、兄弟の争ひ必利より起るものなれば、利を棄てゝ義に隨へば和合せざることなし、大人之を意に介するゝ勿れと、元就欣然として病苦を忘れ

毛利元就訓
誡の結果を
語れ

餘子を顧みて曰、宜しく隆景の言を服膺すべしと、後元就
卒して嫡孫輝元、嗣ぎて立つ、隆景兄吉川元春と心を協せ
諸弟を誡め、輝元を輔佐して業を修めしが故に、二叔の世
を終るまで遺業を墜さざりしは、元就訓誡の力よりなり
と云ふ。

(格言) 家門の内兄弟の間和睦すれば、吉祥忽聚るべ
し、和睦の道は只堪忍なり。(千金要)

(教授要旨)

- (一) 兄弟は互に親愛し、かりとも乖戾すべからざること。
- (二) 常に心を合せて、相助け争ひなすべからざること。
- (三) 兄弟和合せざる時は、家内和親の樂なきのみならず、決して家内の
繁榮を望むべからざること。

(四) 兄弟の間争ひ事あるは、些細なることを堪へ忍ばざるによる故に互
に譲り合ふときは、和合せざることなきこと。

(問詞)

- (一) 元就の教訓を、説くべし。
- (二) 隆景の言を、略述せよ。
- (三) 毛利氏がよく榮えしは、何によれりと思ふか。

(作文題案)

- (一) 兄弟の義務
- (二) 兄弟は五本の指の如し

孝行

宇喜多秀家
は何處に流
されしや

(例話) 關原れ役西軍敗る、宇喜多秀家の西軍の主謀者な
るを以ちて其の子八郎と共に八丈島に流さる、八郎は

一僧の訴狀
い何事と思ふや

幼なり其の乳母之を棄て、逃け去きり、宇喜多の家臣に澤橋氏あるものあり、其の妻八郎が乳母に離れて嶋に赴くを悲み、堅く官に請ひて嶋に赴きけり、發するに望み所生の子三歳にふれるを抱きて、宇喜多家夫の人の許に至り、近侍のものにても養育せしめられんことを請ふ、夫人妻が身をすて、八郎の先途に従ひしを思ひ、深く愛護して此の子を養育したり、夫人いもと前田家より嫁きたるものなきに、後加賀に至り之による、是を以ちて此の子成長の後前田家にて所領を給ひ澤橋兵太夫と名のらせけり、兵太夫深く母を追慕し朝夕涙の乾く暇なし、遂に遁世して行く所を知らず、元和の頃將軍上洛の時一僧あり駕輿に近きて訴狀を捧ぐ、從者之を制すきとも聽かず、遂に

官命は如何

訴狀を受けて僧を糾す、前田家の臣なるを知れり、其の訴狀の主旨は我が母主家のために八丈嶋にあり、子として母を遠嶋に置き獨居るに忍びず、願はくは嶋に至り母に奉仕せんことをとの意なり、官其の志を憐みて曰、汝を嶋に遣はすこと法に於きて叶ふべからず、故に汝書を贈りて母を呼び返すべしと、兵太夫の書を贈るも母の承諾せざるを察すれども、試みに上意に従はんとして書を島に送り、果して母大に憤り、我主の先途を見とゞけんとて此の地に來りし、今汝を見んとて何ぞ主を棄て、再歸るべきや、重ねて申し越さは返答にも及ぶまじといひこしける、官兵太夫を召して曰、事成らざれば如何ともすべからず、若他に願ひたき事あらば或許さるゝとあらんと、

兵太夫の懇
願は如何

兵太夫伏して曰、卑賤の身として上威を畏まず、愚意を陳
ぶる其の罪大なりと雖、尙上意の厚きより更に一の懇
願あり、宇喜多家の前田家と縁故ある事なれば、前田家よ
り毎歲助成の金並に入用の物は、官の許を得て永く八丈
嶋に贈ることを得ば、恩徳之に過ぐるものなり、微賤の身
母への孝行此のひとつにて他にあるとならんと、官其の意
を憐みて曰、此等は別に妨なきに似たれども、巨額の金員
物品を贈與するを許すべからず、又物により贈るべから
ざるものあり、故に其の時に臨み員數と物品とを限りて
前田家へ令すべしと、よりて爾後毎歲加州侯より定め
の如く書記して官に付し、官より其の物件を點檢し嶋へ送
るゝとなきり、此の事四方へ聞えしかば、列侯争ひて兵太

兵太夫は仕
官せしや

夫を徵辟せしかども、我また仕官の意なし、但加賀は舊君
の事なればとて加賀に歸參しけるが、幾程もなく病死し
子なくして家絶えたり。

(格言) 父母若遠方に在さば、則勤めて信書を致し其
の安否を問ひ、心常き之を思ひ、憂愁戀憶せ
ふ、(童子集)

(教授要旨)

- (一) 時々刻々父母を忘れず、常に父母を以ちて心となすべきこと。
- (二) 父母の膝下よりわたりて孝養を盡すべきは勿論、不幸にして遠く相離るゝ時は親しく奉養をすること能はず、たゞ屢信書を致して安否を問ひ、常に憂愁して誠を盡すべきこと。
- (三) 子として父母を思はざるはなけれども、父母の子を思ふ情は更き之より厚し、されば相離るゝときは屢信書を通じて安否を報すべきこと。

と。

(問詞)

- (一) 兵太夫の母、八丈嶋に到りし所以を、語れ。
- (二) 兵太夫、將軍に如何なる訴狀を、上りしか。
- (三) 兵太夫、母の意の動かすべからざるを見て、如何なることをおししか。
- (四) 兵太夫が佛門に歸せし所以は、如何。

(教授方法)

古昔老いたる親を山より捨つるとき、捨てらるる親が我が子の歸路に迷ひやせんと、樹枝を折りて道を導くべしとせしことを、詠せし歌に。

奥山に手折る枝折は、誰が爲ぞ。

我が身を捨て、歸る子の爲。

斯の如く、親の子を思ふの情切あるものあれば、子たるもの親の心を心とすべきことを、懇に教授すべし。

愛國

佐久間象山
の如何なる人となり

(例話)

佐久間象山名は啓通稱は修理信州松代の藩士なり、幼にして穎悟長じて豪邁不羈濟世を以ちて己の任とせり、時海外諸國交々來りて互市を求め、天下騒然たり、象山海防の忽すべからざるを知り畫策する所あり、又海外の事情を知らざるは緩急に臨みて用をなさざることを悟り進みて之を講究す、幕議下田港を開かんとす、象山下田は天險なきは彼の軍をして一日も據らしむべからずとて、馳せて江戸に至り藤田東湖によりて水戸の烈公に建白し、又幕吏堀織部正等に説きて大に其の不可を論じたるにぞ、下田開港の事遂にやみたり、吉田松陰

象山は何故
松陰の事
に坐せられ
しや

象山は何故
刺客の爲
に殺されし

事を以ちて罪せらる松陰が行李の中象山の送詩あり、象山遂に此の事に坐し逮捕せられて獄に下りたきども、幾もなくして放還せられ松代に歸り、望月某の別業に閉居したり、有志の士竊に來りて砲兵の術を學ぶもの多し、或る人象山に之を謝絶せよと勧めしに、象山の曰、學問は國に報ゆるを期するものあり、吾今閉居すといへども國家に任ずるの心は須臾も離さず、志士學のため來るを謝絶して、其の銳氣を挫くことあるべからず、禍害は自定命あり、何を過慮するを須ひんと、教授すること素の如し、象山幽囚九年にして赦さる、後京都に赴きしが、此の時鎖港攘夷の論盛にして諸藩士籍を脱して京都に聚合す、然るに象山獨開港の説を主張せしを以ちて遂に刺客の殺

す所となる、今に至るまで人皆是を悼惜す。

(格言) 國を愛するふゝ家を愛するが如くなるべし

(明達
録)

(教授要旨)

- (一) 國民愛國の精神に乏しきときは、其の國決して昌えざること。
- (二) 國家の急難に方りては、力を盡し心を盡して、救済の道を謀るべきこと。
- (三) 國家は必竟家の大なるものにして、國民は一家族に均しきものあり、左れば人々國事に盡すこと、なほ其の家に盡すが如くなるべきこと。

(問詞)

- (一) 象山のころ、我が國の有様は如何なりしか。
- (二) 象山は、我が國のため、如何なる計畫を考へたるか。
- (三) 象山が罪を得たる次第を語れ。
- (四) 幽囚にありて、人は教授せしか如何。

(五)象山の最後は如何。

(教授方法)

西哲シルレル氏云へることあり、人は貴重なる本國の爲に奮發盡力して之を其の心裡に置きて忘れざれば、則其の勢力益堅固あらんと、これ人は其の本國を愛し其の國の爲に力を盡して、之を愛護するの精神なかるべからざることを教授すべし。

(書取題案)

(一) □チ □ スル コト □チ □ スル ガ □ ク ナル ベシ

(作文題案)

(一) 徳川家光公の愛國

尊王

(例話) 北條高時後醍醐天皇を隱岐に流し奉り、時に行

天皇親臣よ
如何なるこ
とを問ひ給
ひしや

宮護衛の士として深く高時の無道を憤り、窺ひ志を天皇に通ずるもの多かりき、名和行氏も亦その一人なり、天皇一日親臣に問ふ、大事を托すべき人を以ちてす、皆云ふ伯耆の豪族名和長年に及ぶものなりと、因りて行氏を召し還りて長年に諭さしむ、行氏詔を受け未發せざる、先ち、天皇源忠顯と共に窺ひ行宮を遁れ出で、伯耆の名和港に到り成田小三郎なるものを遣ひ詔を傳へしめて曰、朕高時の暴逆に逢ひ隱岐の行宮に在り、久しく幽鬱し病む今遁きて茲に來き、汝宜しく義兵を起して興復の大業を翼くべし、若詔を奉ずる能はずんば早く鎌倉に報せよと、此の日長年兄弟皆集りて宴す、皆奮ひて曰、天子親しく大事を托するに逢ふ、一家の面目此より大なるはなし、事

長年天皇を
何れの地に
奉せしや

成らば王室と共に尊榮富貴なるべし、成らざれば節義を
萬世に耀かさん、宜しく死を以ちて聖體を擁護し奉るべ
しと、議直に決す、長年乃諸弟を率ゐて勤王の師を起し、自
天皇を背負ひて船上に城く、近國の諸族來り應ずるもの
甚多し、是乘輿復辟の初なり、是より長年王事に奔走し
遂に戰歿せり。

(格言) 山はさけ、海はあせなん、世ふりとも、君に二

心、我あらめやも。(實朝)

(教授要旨)

- (一) 吾々が平居安然として其の業を樂むことを得るは、天皇の恩なること。
- (二) 我が皇統は萬世一系にましまして、其の貴きこと極りなきこと。

- (三) 吾々臣民がかゝる皇家に支配さるゝは、絶大の恩絶大の榮なること。
- (四) 故に吾々は皇室の御爲に身命を抛ちて、忠勤をばけみ以ちて天恩の萬一に報い奉らざるべからざること。
- (五) 我が帝國の臣民、古より忠勇の氣象に富み、現在及將來なほ一層の忠勤をばけむべきこと。

(問詞)

- (一) 天皇、伯耆に遁れさせ玉ひし次第を、畧説すべし。
- (二) 長年詔を受けて、如何にせしか。

(教授方法)

日本の國に生れ、日本の臣民たるものは、皇室を尊び、皇室の御爲には、心を盡し、力を盡し、之につぐに一命を以ちてし、其の臣民たる本分を竭し、君主に對して無二の忠僕たるべきことを、教授すべし。

(應用問詞)

- (一) 本居宣長、尊王の事蹟を、語れ。

(二) 織田信長尊王のことを話せ。

(三) 君の難よ赴くは忠なり、王事よ死するは義なり、どの如何なる意か、

(書取題案)

(一) □ハサケ □ハアセナン □ナリトモ

□ニ□□□アラメヤモ

(作文題案)

(一) 國民の義務

(二) 補正行

節儉

後三條天皇
は御膳に如
何なるもの
を充てられ
しや

(例話)

後三條天皇は專儉素を尚ひ給ひ、御扇に檜柄藍紙を用ひらる、又青魚頭を炙り胡椒を塗り以ちて御膳を充てられき、營造の務めて質朴に従ふ、後冷泉天皇の末年風

俗華侈に流れ、下吏の車といへども之を飾るに金を以ち

てす、天皇之を矯正せんと思召し給ひける、即位初、石

清水に幸を都人士女出で、鹵簿を拜觀す、時、車に金飾

するものあり、天皇ために變輿を止め命じて盡剔き去ら

しむ、後賀茂は幸せらるゝに絶えて金を以ちて車を飾る

ものなり、風俗遂に淳素に反る。

(格言) 家中須らく節用を先とすべし、毎日の食用須

らく限制あるべし。(紫雲村示子弟帖)

(教授要旨)

(一) 家を持するに勤と儉との二道あり、然れども如何に勤むるとも浪費濫用しては決して保つべからず、故に專節儉を守らざるべからざることを。

(二) 一人奢れば一家亡び、一國奢れば一國衰ふ、驕奢は實人の大敵あること。

(三) 飲食衣服など兎角奢侈は流れやすきものなれば、よく制限を立て置きて儉素の美風を保つべきこと。

(問 詞)

(一) 後三條天皇は萬乗の尊を以ちてして、如何に自奉し給ひしか。

(二) 天皇は如何にして奢侈の風俗を矯正し給ひしか。

(應 用 問 詞)

(一) 儉約なれば家を興すべし、儉約なれば身を立つべし、儉約なれば業を子孫に傳ふべし、どの意解をなせ。

(二) 自主自立することを保存せんと欲せば、節儉の道を行ふべきを要す、どの如何。

(書 取 題 案)

(一) □ □ □ ラ ク □ □ □ ナ □ ト ス ベ シ □ □ ノ □ □ □ ラ ク □ □ ア ル ベ シ

(作 文 題 案)

(一) 儉約と吝嗇との別

博 愛

高嶋玄俊の
性質如何

(例 話)

高嶋玄俊は近江國高嶋郡の人なり、西京に上りて醫を山本永吉に學び豊後國府内に趣きて開業せり、性質朴直常に節儉を行ひ衣食住の冗費を省き人に交るに信義を專とせり、或る時其の妻外に出づるとして美しき衣を着たるを見て、汝さのみ粧ふこと勿れ、吾常に木綿の外用ひされば汝も亦木綿に改むべし、たとひ絹衣を持ちたりともかく花やかに飾り、人に誇るは却りて鄙しきものなりと誠めたりとぞ、明治二年霖雨頻に降りつゞき五穀登

高橋玄俊の
美譽を助け
しは誰ぞ

類焼の窮民
の状況如何

らず、庶民饑餓に及ばんとせしを以ちて、玄俊己の居宅を質として金子を借り窮民を救はんことを、中尾喜兵衛といふ者に相談しけるに、喜兵衛いたく之を感ず、己も玄俊に力を添へて同志の者をすゝめ、金子を募り五千兩の大金を調へ米を求めて市中近郷の貧民に施せり、是皆玄俊が至誠に感じて奮起したるなり、其の翌年十月府内寺町より出火あり、延焼百餘戸に及べり、此の邊の貧民のみ住める所に於て、殊に凶荒の後物價高直なれば、營作の術もなく、皆焼跡に露宿して暑寒に苦むを憐み、又同志の人々募り金二千五百兩を集め、之を造作の基本となしてこそまでの藁屋なりとを、瓦葺に改め百軒ばかり建て連ね、類焼の窮民に與へしを、全く玄俊が仁心の實効顯れたるなり。

なり。

(格言) 善人は貨を用ひて、人を助け國の爲にす。(爲経)

(教授要旨)

- (一) 人の務は自よくするに止るべからず、人々相共に幸福を享けざるべからざることを。
- (二) 故に不幸に遭へる人を見れば、出來うる丈の力をつくして、救助せざるべからざることを。

(問詞)

- (一) 玄俊の身を持すること如何なりしか。
- (二) 五千兩の救助金は如何にして集りたるか。
- (三) 火災の時、玄俊がなしたることを説け。

(作文題案)

- (一) 博愛の意義を説け

交友

(例話)

トールグワイ
の人の人となり
の如何
ケルゴアレ
の如何
イに興ふる
書の大主意

フランス・トールグワイといふ人あり、其の人となり、己の力を盡し己に憑頼することを最要の目的とせり、然きども又他人の資助及扶掖を重じ、之を承認すること最深かりき、かつて其の友ケルゴアレイ及ストフェルスより、裨益を受けたることを承認しその恩恵に感ぜり、これその神志の助をケルゴアレイより得、その徳行の助をストフェルスより得たればなり、そのケルゴアレイに與ふる書に曰、余の信任する所は獨足下の心あるのみ、足下の余を感化すること實に深しといふべし、零細の行事に於きては他人より裨補を得たるもの多しといへども、志意の基礎を創め品行の根本を立つるに至りては、獨

足下の力は頼きりと、また其の妻マリーより、己の意志を保ち學問を成就することの助けを得たることを承認せり、その言は心志の高潔なる婦人の、その夫の品行をして自貴からしめ、性質卑汚なるもの、必その夫を化して自賤しからしむるものなりと。

(格言) 古より朱に近づけば赤く、墨に近づけば黒

しと云へり。(六論衍義)

(教授要旨)

- (一) 人の心は、善惡共に移り易きものなるが故に、最交る所を擇ばざるべからざることを。
- (二) 故に、良友の之を敬愛して益親しむべく、惡友の之を遠ざけて、成るべく交らざる様すべきこと。

(問詞)

- (一) トークヰイルは、友人より如何ある、利益を得たりしぞ。
- (二) トークヰイルの夫人、若性質卑汚なりせば如何。

(書取題案)

- (一) ヨリロニロヅケバロクニロヅケバロシトロヘリ

(作文題案)

- (一) 水は方圓の器に従ふ

謹 慎

(例話)

直孝は何と云ひしや

永井尙政政事ヲ參預す、一日殿中に於きて井伊直孝直孝は何と云ひしやト會ひ、謂ひて曰、予不肖大任を負荷し憂慮措くこと能はず、願ひくハ貴君の高論を受けて誠となさん、直孝笑ひて曰、余輩老耄何の知る所あらん、尙政固く請ひて止まず、

直孝は如何に新奇なることを傳授すべきぞ

直孝曰、然らば終身の護身符とあすべき事を傳授せん、然れども事極めて重大なり更めて我が邸へ來られよ、尙政大に悦び翌朝晨直孝は如何に新奇なることを傳授すべきぞト起き禮服を着けて直孝の邸に至り謹みて教を請ふ、直孝懇懇に之を迎へ告げて曰、我が傳授する所ハ別義にあらす、即油斷大敵の四字なり、これ至りて卑近の辞かれども、此の語をたに忘れされバ大政に參與して決して過失なきを保すべしと、尙政手をつかへ頭を垂き謹みて訓を奉じ、永く此の語を守るを誓ひ厚く謝して歸りたりといふ。

(格言)

千丈の堤も、蟻蟻の穴を以ちて潰ゆ。(韓非子)

(教授要旨)

- (一) 油斷大敵といふ諺の如く、患は忽にするより起るものなれば、平素謹

みの心肝要あること。

(二)かゝる些細の事、何程の事あらんとて等閑に付するより、遂に取返しの付かざる思を來すこと往々あり、故に常に心を止むべきこと。

(問詞)

(一)尙政の心掛けよきことを話せ。

(二)直孝は、如何なる教訓を授けしか。

(應用問詞)

(一)知りて知らざるものは上あり、知らずして知るは病あり、とは如何。

(二)一言みだりに發すれば、驕馬も追ひがたし、とは如何ある意味か。

(三)能ある鷹は爪をかくす、といへる諺あり、其の意を説け。

(書取題案)

一〇〇ノ〇モ〇〇ノ〇ナ〇チテ〇ユ

(作文題案)

(一)念には念を入れよ

武 勇

(例話)

北條時宗鎌倉の執權たり、是の時元、宋を亡し勢威極めて盛に諸隣國皆元より憎服す、猶我が國使聘を通せず、元主忽必烈韓人により書を送りて曰、服せざるは則兵に尋らん、朝廷之に答へんと欲し鎌倉より下して議せしむ、時宗その書辭の無禮なるを以ちて執りて不可となす、元主復使者をして來らしむ、時宗太宰府に令して之を逐はしむ、凡元の使至ること前後六回皆拒みて納めず、元の兵一萬ばかり來りて壹岐對馬を攻む、事六波羅に報ず、鎮西の諸將に令して赴き拒かしむ、元の兵敗走す、己にして元の使者九人長門に至り留りて去らず、必我が報を得んと欲す、時宗之を鎌倉に致して龍口に斬り、北條實政を以ちて

此の時の方
宜しく何
と答ふべき
か

鎮西探題と
ありし誰
か

元大舉して
入寇せしは
何年何月か

鎮西探題となし、東兵を遣して京師を衛らしめ、西兵の衛
者の悉實政に従しめ、益太宰府の水城を築き冗費を省き
て兵備に充つ、元の使また宰府に至るまた之を斬る、元主
憤恚し舟師十餘萬人を發し范文虎を以ちて之に將とし
て入寇せしむ、水城に抵る、實政等力戰して之を拒く、敵遂
に岸に上ること能はず退きて鷹島に據る、時宗宇都宮貞
綱を遣し兵に將として實政を援けしむ、未到らず會大風
雷あり敵艦敗壞す、少貳景資等奮撃して敵兵を殲し伏尸
海を蔽ふ、其の脱歸するもの僅に三人、時に弘安四年七月
なり、是より元復我が邊を窺はず。

(格言) 大日本、神代ゆかけて、傳へつる雄々しき道
ぞ、たゆみあらずな。(加茂季盛)

(教授要旨)

- (一) 建國以來我が帝國は、一たびも外國の屈辱を蒙らざること。
- (二) これ種々の原因あるも、首として我が國人が國を愛するの心深く武
勇すぐれたるによること。
- (三) 我が神聖なる大日本帝國に向ひて、假初にも凌辱を加へんとするが
如きものあらば、臣民たるもの身命を犠牲に供して之を扞禦せざる
べからざること。
- (四) 吾人の祖先はかく完美なる國体を維持し來れり、將來一層の國光を
發揚せんことは、吾人臣民の義務なること。

(問詞)

- (一) 元主は、如何なる意志を以ちて、使を我が國に遣したるか。
- (二) もし程よく元に答へしならば、如何なると思ふか。
- (三) 時宗は、數回の使者を如何に處せしや。
- (四) 元人、入寇の勢如何。

(五)元兵滅亡の事狀を語れ。

(應用問詞)

- (一)臣民の國家に盡すべき義務の最貴きものは何ぞ。
- (二)我が國の御稜威をまさんには、如何すべきや。
- (三)國家を守り國威を保つは、何よりぞ。

(書取題案)

(一)□□□□□ユカケテ□ヘツル

□□シキ□□グタユミアラスナ

貞淑

(例話)

皇后親御膳
を省視する
は、何故なる
か

順聖皇后ハ明の太祖の後なり、后帝ハ從ひて軍にあり、恒ニ謹みて婦道を執る、帝膳を御すること、后必自省視す、宮人請ひて曰、宮中人衆ニ聖體を煩すこと勿れ、后

皇后は何ぞ
奏上せられ
しや

曰、吾固より宮中人あるを知る、但婦の夫ニ事ふる謹まざるべからず、膳羞の上進淨潔ならざるべからず、若し至らざることをあらは汝が輩責を受けん、吾が心豈安からんや、吾がこれをなす所以のもの、一ハ以ちて上を敬して敢忽しせず、一ハ以ちて汝が輩を保ちて責を免れしめんと欲すればなり、豈人なきがためならんやと、一日后侍人をして小學の書を誦せしめ、意を注ぎてこれを聴き、既にして奏して曰、小學の書ハ言曉り易く事行ひ易し、人道に於きて備らざる所なし、眞ニ聖人の教なり、盡ぞ之を表章し給へざると、帝曰、然り朕己ニ親王法駙馬大學生をして、威これを講讀せしむと。

(格言) 婦は夫を敬ひて、和順かるべし。(大和俗訓)

(教授要旨)

- (一) 夫婦の間は須臾も敬愛あかるべからず苟是なくんば一日も和親を保つべからざること。
- (二) 夫の功績は婦の内助によること極めて大なれば婦は常に敬順して夫を助けざるべからざること。
- (三) 夫婦は家の兩柱の如し若し相和せずんば如何でか一家の昌榮を期すべけんざれば些細なることよりして乖戾を來すが如きことあるべからざること。

(問詞)

- (一) 皇后が膳を省視せられたる二つの理由は如何。
- (二) 皇后は小學を聴き如何なることを帝に奏せられしか。

(書取題案)

- (一) □ハ□ナ□ヒテ□□ナルベシ

(作文題案)

(一) 女子の徳

長上

板野重右衛門の性質如何

(例話)

羽後國置賜郡長橋村に板野重右衛門といふ農民あり、性質篤實にしてよく父母に孝養を盡せり、叔父に利兵衛といふものあり、年八十六にして痰症を患へしが、孫利助貧窮なるを以ちて薬餌を始めとし、朝夕の食物まで重右衛門方より調へて懇々取扱ひけり、病いよく重りてよりハ、日夜訪ひて肩腰をもみ、飲食をすゝめ介抱に至る所なけきは、利兵衛も重右衛門を實の子の如く思ひて、片時も側を離ちかたく慕ひたりとぞ、かく誠實なる行一家より一村に及びてみな人稱美たりとかバ、官より絹二匹を賜りて行狀を賞せらるたり。

(格言) 家にありて叔父に事ふること、當ふ父の如く、叔母に事ふること、母に事ふるが如くすべし。(蔡邕村示子弟帖)

(教授要旨)

- (一) 凡己より年長けたるものに、尊敬の道をいたさるべからざること。
- (二) 叔父叔母は、我が父母の兄弟にして、其の血縁最親しきものなれば、之に事ふること、父母に事ふると同じくせざるべからざること。
- (三) たとひ己の父母をよく養ひたりとも、叔父母を粗忽にするとき、また不孝の罪を免れざること。

(問詞)

- (一) 重右衛門の其の父母に事ふること、如何ありしか。
- (二) 重右衛門が叔父の病に侍するさまを、語れ。

(應用問詞)

- (三) 叔父の重右衛門に對し、如何なる感情なりしか。
- (一) 汝等もし叔父母に對して不親切あらば、汝等の父母は、如何に感じ給ふか。
- (二) 叔父母の家もし貧究に迫らば、之を如何するか。

(作文題案)

- (一) 遠方にある叔父の病を尋ねる書狀

節 義

(例話) 文天祥は宋の人なり、徳祐の初元の大兵三道より攻め入る、天下に詔して勤王せしむ、將士率頸を縮めて駭汗す、天祥詔を奉じ慨然として郡中の豪傑を發し孤兵を提けて獨赴く、其の友之を止めて曰、是何ぞ群羊を驅りて

天祥の止るべきや否や

張弘範の文
天祥に云ひ
何し言葉に如

猛虎を搏つゝ異らんや、天祥曰、吾亦其の然ることを知る、
たゞ國家臣庶を育養すること前より三百餘年、一旦急あり
て兵を徵す一人の應ずるものなり、吾深く之を恨む故に
自力を量らず身を以ちて之を徇ふ、庶幾く天下の忠臣
義士將に風を聞きて起る者あらん、此の如くなきは社稷
なほ保つべきなりと、天祥度宗の二子益王、廣王を奉じて
恢復を謀り、崎嶇間關、頗辛酸を極む、戰破れ遂に元に執へ
らる、元の將張弘範客禮を以ちて之を待つ、尋ぎて厓山の
戰破れ宋亡ぶ、是より於きて弘範置酒大會し、天祥に謂ひて
曰、國亡ぶ丞相の忠孝盡能く心を改め、宋より事ふるものを
以ちて今より事へば將に宰相たることを失はざらんとす
と、天祥泣然として涕を出して曰、國亡びて救ふこと能は

博羅天祥を
跪かしめん
とせしとき
天祥は如何

天祥の死
せざる所以
は如何

ず、人臣たるもの死して餘罪あり、況や敢其の死を逃れて
其の心を貳にせんや、弘範爲に容を改む、乃護送して燕に
赴かしむ、元の相、博羅等天祥を見る、天祥入りて長揖す之
を跪かしめんと欲す、天祥曰、南は揖し北は跪す、予は南人
南禮を行ふ安んぞ跪くことをせん、博羅左右に命じ之を
地に曳き、或項を抑へ、或其の背を扼せ、天祥屈せず首を仰
ぎて之と抗言す、博羅曰、古より宗廟土地を以ちて人に與
へて復逃るゝものありや、天祥曰、予前に使を軍前に奉じ
尋ぎて拘執せらる、己よりして賊臣ありて國を獻じ國既に
亡ぶまさい死すべき時なり、死せざる所以のものは、度宗
の二子漸東よりあり、老母、廣王あるを以ちての故のみ、博羅
曰、德祐の嗣君をすてゝ二王を立つるは忠か、天祥曰、此の

到底成功あり
きを知りて
天祥が志は
之をなすは
何ぞ

時に當りて社稷を重しとし君を輕しとす、我別し君を立て
つるは宗廟社稷のために計るなり、博羅怒りて曰、爾二王
を立てし竟に何の功を成せる、天祥曰、君を立てし以ちて
宗社を存す、一日を存すきは臣子一日の責をつくす何の
功か之あらん、博羅曰、既し其の不可なるを知る何しぞ必
爲さむ、天祥曰、父母の疾あるなすべからずといへども藥
を下さざるの理なし、吾が心を盡して救ふべからざるは
則天命あり、今日天祥此し至る死あるのみ何れぞ必しも
多言せん、博羅之を殺さんと欲す、元主聽さず、乃之を囚ふ、
天祥一小樓に坐臥し足地を履まず、正氣歌を作りて以ち
て己が志を述ぶ、元主天祥を召し之を諭して曰、汝宋に事
ふる所以のものを移して我し事へば、當に汝を以ちて相

元主歎じて
何といはれ
しぞ

となすべし、天祥曰、天祥は宋の宰相安んぞ二姓し事へん
や、願ひくは之に一死を賜りて足きり、遂し之を殺す、天祥
刑に臨み殊し從容吏卒に謂ひて曰、吾が事畢る南向再拜
して死す、元主歎じて曰、文丞相は眞の男子あり、本朝の將
相皆及ぶべからずと。

(格言) 士の身を立つるは、名節忠義を以ちて、本とな
すことを要す。(羅從愚)

(教授要旨)

- (一) 人臣は君王の鴻恩を蒙るものなれば、忠義を以ちて之に報いざるべ
からざることを。
- (二) 忠義のためは、一身一家を顧みるべからざることを。
- (三) 人臣となりて二心を抱き、節義を忘れて利祿を貪るが如きは、人にし

て人にあらざることを。

(四) 人臣の祈る所の其の君主の安泰ならんことなり、其の社稷の長久ならんことなり、故に身を碎き心を致し、以ちて其の方法手段を盡し、百事悉敗れまた成すべからざるに至りて死すべきこと。

(問詞)

(一) 初め天祥が力の及ばざることを知りて、勤王の師を起さしは何故ぞ。
(二) 元人天祥に向ひ、降らば乃宰相たらしめんと云へり、然るゝ天祥は宰相をすて、却りて死地に赴きたり、天祥をして之をなさしめたるものは何ぞ。

(三) 元主は、天祥を何と稱せしぞ。

(四) 天祥の元に執へられてより、其の死に至るまでの大略を語れ、

(五) 天祥は、始め事の敗れたる時に死せず、其の後久しく生きながらへたるは何故ぞ。

(應用問詞)

- (一) 汝等、文天祥のことを聞きて、如何に感せしか、其の感せし處を述べよ。
- (二) 本邦の人にして、文天祥に似たる行爲の人ありや、否や。
- (三) 忠臣の話しを聴かば、汝等之に倣はんことを、願ふや。
- (四) 和氣清磨の事蹟を、語れ。

(書取題案)

- (一) 士の身を立つるの名節忠義を以ちて本となすことを要す。
- (二) 天祥度宗の二子を奉じて恢復を圖らんとせしかども、成らず終に捕へられて死せり。

(作文題案)

- (一) 克く忠よ

治 産

(例話)

岩次は江戸橋本街の彫工半次の長子なり、幼より

岩次いすの父に
別れし何
歳の時か

汝等もし岩
次ならんか
何する

て割鬨の業を父より學びて其の産業を助く、半次久くと病
みて歿せければ家賞殆蕩盡せり、岩次時に年十三なり、母
祖母及弟二人あり、一家五口岩次に頼りて糊口せり、岩次
晝に他の割鬨の家より雇れて纔の賃錢を得て歸り、夜は燈
下に版ありて深更に及ぶまで寐ねず、祖母岩次の幼弱に
して精神を勞し、病を生せんことを慮り、夜は早く寐ねて
休息すべしといへば、岩次も祖母等の憂を知り、その言に
従ひ寢に就き、家人のみを熟睡するを伺ひ密に起きて工
事より就けり、此の如く日夜孳々として少しも怠ることな
ければ、一家糊口凍餒の患を免る、其の母もまた貞純よ
して善く姑に事へ、一家いと睦しくよくれたまりけき、
幕府より岩次を賞して白銀七錠を賜ひ、祖母には終身一

人口を賜ふ、都下之をさへて其の家に至り、餞物など賞與
するもの甚多かりき。

(格言) 夙に起き夜に寝れ、爾の所生を忝しむること

勿れ。(詩經)

(教授要旨)

- (一) 稼ぐに追付く貧乏なし、といふ諺の如く、其の業を勉勵せば、決して究
乏の患なきこと。
- (二) 他人と同一働きをなしてすら、普通一般の生計を營みうべし、若他人
より先に起き他人より後に寝ねて、其の業を屬まば、餘裕を生ずるに
至るべきこと。

(問詞)

- (一) 岩次父歿して年十三、如何にして家族を養ひしか。
- (二) 祖母岩次が働きの過ぐるを憂ひしとき、岩次如何よせしか。

(三) 岩次の家計、後には如何なりしか。

(應用問詞)

(一) 人のねる、その間に深く耕して、多く作りて、多く収りよ、とは如何なる意か。

(二) 少年のとき勞苦せば、暮年は安樂を享くべし、とは如何。

(三) 勤勉の人は、萬物を化して黄金となすの術あり、光陰と雖亦之を黄金に化せ、とは如何。

孝行

(例話)

式部權太輔大江舉周病に臥して危篤なり、母赤染右衛門憂懼し勝へず、住吉の廟に詣り、其の死を代らんとを祈る、舉周の病愈えしかば右衛門大に悦びて己が死を俟つ、舉周之を知り樂みず、潜に住吉に往き廟に泣きて

赤染右衛門
住吉の廟に
祈願せし
や

曰、嚮し我神德によりて幸に死せざることを得たり、然れども母と生死を易ふこと、我が忍びざる所なり、切に冀はく、我が病初の如くにして母の恙なからんことをと、懇禱日を累ねて京に還る、其の身また病まず母も亦壽を以ちて終へたり。

(格言) 子と思ふ道にまどひて、今ぞしる、秩父の山の、

ふかき恵みを。(小澤廣庵)

(教授要旨)

(一) 親の子を思ふことの深き、實にたとへんやうもあし子たるもの其の恵みに報せざるべからざることを。

(二) 父母の子のために如何なることをもあして、其の愛を盡すものあれば、子にまた父母のためには如何あることをなしても、孝を致すべきこと。

(問詞)

- (一) 舉周の病氣危篤ありしとき、其の母如何なることをなせしか。
- (二) 舉周平癒の後、如何なることを、住吉の廟に祈りしか。

(應用問詞)

- (一) 子と思ふ親は、親と思ひあへ、

世にありがたき人といはれん。

如何なることを詠みしものか。

- (二) 奥山に、手折る枝折は、誰が爲ぞ、

我が身を捨て、歸る子のため。

右の歌意を述べよ。

(書取題案)

- (一) □ナ□フ□ニマドヒテ□ヅシル
□□の□ノフカキ□ミナ

(作文題案)

- (一) 子の親に對する心得

- (二) 孝行

禮敬

(例話)

伊達政宗の臣に原田左馬之助なるものあり、威望一藩に高し、後政宗一人の勇士。後藤孫兵衛なるものを召しかへたり、孫兵衛かつて途に左馬之助に逢ひ、恭しく禮を施せしに、左馬之助は答禮をなさずして過ぎ行きけり。孫兵衛ふかく之を啣み、爾後逢ふ毎に左馬之助を侮辱す。左馬之助以ちて意となさず、常に溫言と禮貌とを以ちて之を遇しけり。政宗之を聞き、左馬之助を謂ひて曰、後藤

新に召し抱
誰へし勇士は

左馬之助は
政宗の言を
賛すべきや
如何

左馬之助は
如何せしぞ

新參を顧みず屢無禮をなす由、因りてかれに暇をつかは
さんと、左馬之助之を留めて曰、余榮職を帶ふるを以ちて
一藩の士争ひて諛言を呈す、然るに彼少しも屈せず新參
を以ちて余に抗す、其の剛氣却りて賞するに足る、留めて
厚遇するに如かずと、政宗左馬之助が大度に感ト遂に其
の事を止む、孫兵衛はかゝる事のあるべしと知る由も
なく、竊に思へらく原田は過日の無禮にも似ず、近ごろ頻
に我に媚ふるの風あり、斯る卑劣の奸物を生かし置くは
一國の爲ならずと、乃往きて左馬之助を訪ふ、左馬之助出
で之を迎ふ、孫兵衛怒りて曰、汝左馬之助よりも前日の無禮
を忘るまじと、傍なる湯釜を取りて之を投げ付け刀を拔
きて之を撃たんとす、左馬之助少しも騒がず猿臂を伸べ

て孫兵衛の腕を押へ、徐に言ひて曰、吾等兩人此の處に耦
刺せば、伊達氏の兵鋒之より衰へ侮を隣國に取る知るべ
きのみ、汝私憤のため、此の理を忘れ以ちて公事を廢せ
るか、孫兵衛此をき、恰酔の醒めたるが如く、深く己が
無謀を耻ぢ容を改めて謝して曰、かゝる賢明大度の原田
氏とも知らず無禮に及びしこと、今更悔悟に耐へず、今よ
り心を翻し兄を以ちて足下を視ん、足下また弟を以ちて
余を視よと、遂に無二の親友となれり。

(格言) 君子の人と接するは、禮讓を以ちてす、故に争ふ
所なし。(貞原篤信)

(教授要旨)

(一) 人に接するより、決して傲慢なるべからず、能く敬禮をつくすべきこと

と。

- (二) 他人吾に無禮を加へたりとも、怒りて之に返報するが如きことあるべからざることを。
- (三) 他人の吾に對し怒を擁きたらば、能く理を説きて之を融すべきこと。
- (四) 凡べて禮讓を以ちてせば、決して争ひあることなし、己人に譲る時は自損するが如く見ゆるも、其の實決して然らず却りて己の徳望を高め、人の尊嚴を増すに至ること。

(問詞)

- (一) 孫兵衛の無禮に對し、左馬之助は、如何に之をわしらひしか。
- (二) 政宗、孫兵衛は暇をつかはさんとせしに、左馬之助が之を止めたる所以、如何。
- (三) 左馬之助若毫厘も假借することなく、孫兵衛と争ひたらんよ、果して如何なる事になるべきか。
- (四) 左馬之助何といひて、孫兵衛の心を挫きしか。

(五) 二人の間終に如何なることよかりしか。

(應用問詞)

- (一) 汝等若途中にて汝等を罵る友達あらば、之を如何にするか。
- (二) 汝等人より喧嘩をしかけられなは、如何するぞ。

交友

嘉明の正信
を恨みし
何故か

(例話)

加藤嘉明本多正信と親み友とす、徳川家康關ヶ原の功を以ちて嘉明を五十万石に封せんとす、正信之を不可かりとして止む、嘉明傳へ聞きて正信を恨む、偶々正信嘉明を訪ひ、談此及ぶ、曰、吾足下に大國を賜ふべかりしを止めし、實に足下に對して忠を盡す心なり、何となれば足下の智勇俱にすぐき、又た豊臣家の恩を蒙りしことも深し、古より功成り名遂けて身退くといへり、今領國の

嘉明の恨み
何故にと
けしぞ

少き安んずれば將軍家の恩遇子孫に至らん、若大國を
領すれば世人の疑ひ恐るゝ所となり、終を全くする所以
にあらず、吾此の理を思ふが故に、さきに之を止めたり、必
恨むることなかれと、嘉明ふりく其の言に感じ恨を釋さ
たりといふ。

(格言) 直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、

益なり。(論語)

(教授要旨)

- (一) 直言骨硬の人を友とするは、終身の利益なること。
- (二) 便佞阿諛の友人は、遂に己を禍害の地に引き入るゝものなること。
- (三) 友人のためには真心をつくして、其の利益を計るべきこと。

(問詞)

- (一) 嘉明が初め正信を、恨みしは何故なるか。

(二) 正信は何故に其の友人の榮達を、さまたけたるか。

(應用問詞)

- (一) 彼の小人を友とするは、鳩毒を飲むが如し、とは如何。
- (二) 善を責むるは、朋友の道なり、とは如何なる意か。
- (三) 忠告して之を善道す、不可なれば則止む、とは如何。

(書取題案)

(一) 口ナロトシ口ナロトシ口ナロトスルハ口ナリ

(作文題案)

- (一) 友人の懶惰を諫むる書牘

貞淑

石川氏の人
となり如何

(例話)

大久保忠隣の夫人石川氏、溫柔勤儉にして下を撫
む貴顯を以ちて人々驕らず、その夫を敬すること賓の如

く、子を教ふること師の如し、言動常あり、衣食制あり、淑徳の譽殊に尙し、家政を治むるの暇、心を文學に傾け和歌を詠じて以ちて樂となす、夫人病革なるに方り、側に侍するもの法諱をすゝめんと請ふ、夫人笑ひて曰、死生は常の道なり、妾平生佛を嗜まず、今奚んぞ法諱を以ちてせんと、夫人七子あり、其の三子大坂の役皆戰歿せり、夫人哀悼止む能はずと雖義を以ちて心を制し私を以ちて公を犯さざりしといふ。

(格言) 和順中は積みて、而して英華外に發る。(續肥)

(教授要旨)

- (一) 男は剛を尙び、女は柔を尙ぶ、剛柔相和して一家昌ゆること。
- (二) 婦人は、よく家政を料理し、兒子を教育し、以ちて夫を助くべきこと。

(三) 婦人にして淑徳なくんば、夫は内に顧みる所あるが故に十分よ力を外に伸す能はざること。

(問詞)

- (一) 石川氏の操行を略述せよ。
- (二) 其の子息の戰歿せし時、石川氏の狀如何。

(應用問詞)

- (一) かたちこそ、深山がくれの、枯木なれ、
心は花に、おさはなりかん。

此の歌の意を問ふ。

- (二) 無智なる美人は、造作なき家屋の如し、どの意を語れ。
- (三) 才徳ある婦人は、美あらずとも家を飾るゝ足る、どは如何。
- (四) 丈夫の幸不幸は、妻女の賢愚にあり、どは如何なる意か。

(書取題案)

- (一) □□□ニ□ミテ□シテ□□□ニ□ル

(作文題案)

- (一) 人はみりより心がら
- (二) 瀧長愷の妻のことを記せ

謹 慎

(例話)

徳川秀忠天性謹慎にして一言一行といへども忽にせず、家康かつて本多正信に諭していはく、將軍の謹密は洵に美といふべし、然りとはいへども事謹密にするを要せざるものあり、時に戲言謔語をなして氣を散するも亦可ならんと、正信唯々として退く、他日秀忠に謁し席を前めて曰、殿下の謹慎甚しきに過ぐ、請ふ少しく放誕せらるべきよ、是太公の訓なり、と秀忠笑ひて曰、大公の放誕を説く

家康の言理
ありや否や

人之を買ふ他なら、太公は天資英邁にして其の言實價あるを以ちてなり、吾が如きは則然らず、資性非徳なればたとひ放誕を説くも人誰か之を信せん、却りて世の物笑ひとならんのみ、寧謹みて過失なきに如かざるあり。

(格言) 話の多きは話の少きに如かず、話の少きは話の好きに如かず。(五種遺稿)

(教授要旨)

- (一) 多言は禍を招くの基なること。
- (二) 他人の利益となり、又己の利益となることにおらざれば、言はざるやう慎むべきこと。

(三) 談話を以ちて、人を嘲弄するが如きこと、最誠むべきこと。

(問詞)

- (一) 秀忠は如何ある人なりしか。

- (二) 家康、如何なることを諭えしか。
- (三) 秀忠の答へし所を、語れ。

(應用問詞)

- (一) ものいへば、唇さむし秋の風。
如何なることを、詠みしものか。
- (二) いひやせまじ言ひでやあらん思ふこと、
いはぬはいふに、まさるありけり。

此の歌意を説け。

- (三) 既に學びたる、秀忠公のことを、語れ。
- (四) 欽めば身修り庶事康し、どの意解をなせ。

(書取題案)

(一) □ノ□キハ□ノ□キニ□カズ□ノ□キハ□ノ□キニ□カズ

(作文題案)

- (一) 我が身のもちかた

正直

(例話)

備中國山手村に加兵衛といふ正直なる農民ありき、東照宮の祭日に方り、自宅の柿實を宮内の茶屋某に賣り、柿實百に付き銀五匁を請取り、夫より岡山に至り鎌をあつらへ居たる、向ひの店にてさきの茶屋の男、かの柿を一匁に付き二十一づゝに賣り居たり、加兵衛怪みて其の故を問へば、かの男思ひの外損失と、かれり然れども損益ハ商人の常ありといひて、少しも悔みたる色なく、加兵衛氣の毒に思ひ、錢百五十文出して返さんとすれどもかの男肯せず、よりて其の童女の側にあるを見、之に錢を與へて走り去る、然るに親の諭せしと見え、娘ハ追ひかけ來り錢を返さんとせきども、加兵衛之を取らざるを以

此の時加兵衛は如何に感ずると思ふや

茶屋は何を贈りしや

ちて聲をあけて泣き錢を投て去る、加兵衛止むことを得ず家に歸りて妻と計り、茶及蜜柑を贈れり、茶屋のまた新しき魚を持ち來りて加兵衛に與ふ、加兵衛夫婦益氣の毒に思ひ、強ひて之を引き止め、直に之を調理して心の限り、饗應して歸したりとぞ。

(格言) 偽のなき世なりせば、いばかり、人の言の

葉、うれしからまし。(舌歌)

(教授要旨)

- (一) 人の常に正直を以ちて心の守りとし、假初にも偽りあるべからざることを。
- (二) 吾正直を以ちて人々交るときは、人も亦正直を以ちて吾を待つことを。
- (三) 人或不正の手段によりて、利益を占めんとするも、天理に決して不正

を容れず、故に到底禍を免れざることを。

(四) 偽を以ちて人を陥れんとするは、必竟自其の身を陥るゝものなることを。

(五) 世人みな正直を以ちて心となし、決して相欺き偽ることなければ、人世の幸福計るべからざることを。

(問詞)

- (一) 加兵衛の商人が己の賣りたる柿のため、損失するを見て、如何なる事をなししか。
- (二) 商人の加兵衛の厚意に對して、如何なる事をなまじぞ。

(應用問詞)

- (一) 加兵衛は、一匁に柿實幾個の割合に賣りしか。
- (二) 何故に、一匁に二十一個に賣れば、損失となるか。
- (三) 一匁を當時の二錢と假定せば、柿實一個の價は、如何。
- (四) 前問の如く、二錢に付柿實二十一個を賣れば、總計三百個の損失は、何程か。

(五) 損して徳どれどは如何なる場合を、云ふべきか。

(六) 姿こそ深山がくれの、枯木なれ、

心は花に、なみやこびど。

此の歌意を、説け。

(書取題案)

(一) □○○あき□なりせばいかばかり

□の□の□うれしからまし

(作文題案)

(一) 正直

(二) 森蘭丸の正直

惜陰

(例話)

雲井龍雄ハ米澤の人なり、安井息軒ニ從ひて學ぶ

龍雄睡氣の
催し來りし
ときは如何
よせしぞ

龍雄が寐末
稱せられし
は何による
かは

資質虚弱なれども非常に勉強せし人なり、深夜讀書の際
睡氣の催し來る時ハ冷水を以ちて面を洗ひ、睡氣愈盛に
して冷水功なきに至きは、蕃椒粉を嚙む尙功あき、至れ
ば棒を以ちて己の頭を毆ちて警めけり、常に朋友に告げ
て曰、一棒よく千百の睡魔に勝つと、故に龍雄の頭ハ重蘭
累々として、宛蜂の荒せし梨子の如くなりしといふ、後塾
長の飲けたる時息軒龍雄を以ちて塾長となせり、竟ハ幕
末屈指の豪傑と稱せらるゝに至きり、

(格言) 大禹は、聖人なるに、乃陰を惜む、衆人に至り

ては、當に分陰を惜むべし。(兩説)。

(教授要旨)

(一) 匪勉刻苦の効ハあらずんば、決して學問上達せざることを。

- (二) 一寸の光陰といへども、空しく之を費すことなく、常に勉力すべきこと。
(三) 些少の時間を軽するものは、また數日を輕視し、今日勉めざるものは、また來日怠るものなり、故に到底成業の期なきこと。
(四) 古の聖人賢哲は、みな一寸の光陰をも重じて、勉力せられたり、されば平凡なる人々は、一分の光陰をも重じて、力を盡さるべからざること。

(教授方法)

一刻の未來の程も、はかられず、

如何で一時を、あだまくらさん。

此等の歌意より説き起して、以ちて雲井龍雄の刻苦勉強遂に名聲藉甚たるに至りしも、これ光陰を愛惜せし結果なることを、繰述して格言に歸納すべし。

(問詞)

- (一) 龍雄の體質如何。
(二) 夜勉強の時、睡氣さし來るときは、先如何なることをおししか。
(三) 冷水、功なきに至りて如何にせしぞ。
(四) 蕎麦粉、功なきに至りて如何にせしぞ。
(五) 一棒能く千百の睡魔に勝つとは如何。
(六) 龍雄の頭部は、如何なりしか。

(應用問詞)

- (一) 陶侃の惜陰のことを、はなせ。
(二) 今日といふ、其の今日の日に働きて、
今日の仕事を、明日に延すな。

此の歌意如何。

(書取題案)

- (一) □□ハ□□ナルニ□□□□チ□ム□□ニ□□リテハ□□□□□□チムベシ

(作文題案)

- (一) 時間は金なり
- (二) 光陰矢の如し

三學校退散後溫習會を開く書牘

博愛

伊能忠敬氏
の原姓は如何

(例話) 伊能忠敬原姓ハ神保氏伊能氏に養ふ、よりて氏とす曆學を以ちて名あり、伊能氏世々近郷の右族たり、偶資産傾き家道日ハ衰ふ、忠敬慨然として興復を以ちて志となし、日夜黽勉其の業をはけみ、嚴に驕奢を禁じて儉素を守り家衆百口躬を以ちて率先す、是を以ちて産や、復す、天明三年關東大ハ饑う、忠敬乃私財を抛ちて窮民ハ賑恤し、其の恩惠ハよりて全治するもの數村に及ぶ、全六年又

饑饉す、忠敬之を賑すること前の如し。

(格言) 博く施して衆を救ふは、禍に遠り富を保つ

の道なり。(貝原篤信)

(教授要旨)

- (一) 人はたゞ己の身を平安にするに止らず、他人の身も亦平安あらしむるやう、勉めざるべからざること。
- (二) 故に人の患難究危ハ罹るを見れば、身を忘れて之を救ひざるべからざること。
- (三) 已飽食暖衣して、他人の艱苦を省みざるが如きは、人道に於きてあるまじきこと。
- (四) 人はみな應分の力をつくして、他人を救ふことを得ること。
- (五) 他人を賑恤するは、目前己の損失とあるが如きも、結局自家の福運を來すこと。

(問詞)

- (一) 忠敬如何にして家産を興復したりや。
- (二) 天明三年及全六年の饑饉に方り、忠敬は如何にせしぞ。

(應用問詞)

- (一) 汝等、途中病苦に迫る人を見れば、之を如何にするか。
- (二) 人の艱苦を見て、少しも之を省みざる人あらば、汝等は之を何と評するぞ。

(書取題案)

- (一) ロシロシテロチロフハロニロリロチロツノロナリ

(作文題案)

- (一) 博愛衆に及ぼす
- (二) 貧民救助を協議する書牘

寛大

(例話)

かゝる無禮何にするか

從者は如何にせんぞ

柳澤里恭うつて私用あり、人を從へて行きけるが、途中、或る家の樓上より唾したるもの、過ちて里恭の禮服まかゝれり、從者大に怒り唾したるものを引き出さんとせしに、里恭之を押し止め、はし此の處をかるべしとて其の家に入りて、挾箱より着かへの禮服を出して着かへけるに、家の者一同は出で、其の罪を謝す、里恭曰、こゝ全く過ちならん、さきさき以來を戒むべしとて出で行きぬ、從者いかに其の儘に宥へ給へるぞといひけきは、大切な用事に行きて、かゝる些細なる事に暇どるべからず、吾が常に守れる堪忍は此の事なりと答へけり、其の後又私用ありて出でし折じ、夏の頃にて溝の汚水を道に打ちたるが、里恭の袴を穢しけり、從者大に憤り既ち打擲に及

はんとせしを、里恭又押し止めて行きければ、従者言ひ甲斐なき事なりと云ひけるに、左にあらず今日の私用にて出でたり、私事のため人に罵るは士たるの本意に背けり、たゞ堪忍たにせは世に耻辱といふことあらずと答へたり。

(格言) 度量寛廣なれば受用の處あり、彼の局量偏

淺なるのも、空しく自懊恨するのみ。(呂叔簡)

(教授要旨)

- (一) 度量は廣く持つべし、度量廣ければ些細なる事のため心動かず、従ひて心ゆたかなること。
- (二) 大人君子は、人を寛假して深く其の過を咎めざること。
- (三) 心狭く怠り易き人、多く後に悔ゆることあること。

(教授方法)

大海の原の如くに心を、

唯ひろくと、くらせ世の人。

此の歌の俗解より説き起して、寛恕の處世の一要務あることを知了せしめ、漸次事實に説き及ぼし、問詞應用問詞を以ちて生徒の納受せしや否やを試み、然る後格言を講述して之を歸納すべし、時として格言を誦せしむるも可なり。

(問詞)

- (一) 或る人里恭に、唾を吐きかけたる時、従者之を如何せんとせしか。
- (二) 里恭、如何せしぞ。
- (三) 里恭が、其の罪を咎めざりしは、何故なるか。
- (四) 汚水を、かけられしとき、従者また如何せんとせしぞ。
- (五) 此の時、里恭は何といひて、之を止めしか。
- (六) 里恭が、平素守りたる所は、何あるか。

(應用問詞)

- (一) 人もし過ちて禮を汝等に失したることあらば、其の人の行は果して罪ありや否や、又汝等は之に對して如何せんとするか。
- (二) 人もし故意に無禮せば、之に處するの道如何。
- (三) 寛かれば衆を得、とは如何なる意味か。
- (四) 善を嘉して不能を矜む、とは如何なることをいひしものか。

(作文題案)

- (一) 高倉天皇の寛大

溫 和

伊藤仁齋の幼時如何

(例話)

伊藤仁齋は京都の儒者なり、幼にして深沈戲遊を好まず、十一歳のとき始めて大學の治國平天下の章を讀み、歎じて曰、今世亦之を知るものあるかと、刻苦學を研さ

仁齋獨如何せしか

遂に大儒とかれり、乃門を開きて子弟を教授す、來謁するもの三千餘人の多きに至る、仁齋性溫厚篤實にして、人と爭はずよく人の過を恕す、其の人に接する溫和にして、城府を設けず、徳大寺公學を好み、毎に諸儒を會して相論難せしむ、諸儒互に攻辨し、卒に相詬罵するに至る、然れども仁齋獨坦夷溫厚始終爭はざりといふ。

(格言) 人と言ふ時、宜しく和氣從容なるべし。(讀傳)

(教授要旨)

- (一) 人に對しては、顔色を和け語氣を平にすべきこと。
- (二) 若急遽ある言動を以ちてするとき、由なき事のため、人を怒らしむることあれども、溫和なる言動を以ちてするとき、自人を悦服せしむるものなること。

(教授方法)

やはらかに言ひてもことは聞ゆるを、

なご高聲にひがむ世の人。

斯の如き反面的の歌意より、温和恭順の美德なることを説明し、然る後事實と格言とを照合して諄々誨告すべし。

(問詞)

- (一) 徳大寺公の講席にて、諸儒の舉動如何なりしか、及仁齋は如何せしぞ
- (二) 伊藤仁齋十一歳の時、如何あることを、感歎せしや。
- (三) 仁齋先生の人となり如何。
- (四) 仁齋先生の人に接するの模様を、語れ。

(書取題案)

- (一) ロトロフロハロシクロクロナルベシ

(作文題案)

- (一) 短氣は損氣

剛勇

(例話)

唐の穆宗皇帝の時、成徳軍の裨將王庭湊あるもの反して、節度使牛元翼を深洲に圍む。帝韓愈を以ちて兵部侍郎となり、往きて其の軍を宣撫せしむ。且愈に詔して曰、境に至り更に更に事勢を觀よ。遽に入ること勿きと、愈謂へらく止むるは君の仁なり。死するは臣の義なり。使して境に入らざるの理なしと、遂に往きて鎮に至る。庭湊兵仗を備へて之を迎ふ。既に館あり及べし。甲士庭に羅る。庭湊曰、近ごろ紛々として爭乱せしむ。皆群下のなす所。吾が心にあらざと、愈聲を勵して曰、天子足下の才を以ちての故に之に節鉞を賜ふ。然るに足下は部下の兵士を制すること能はざるやと、時に甲士等進み出でて曰、先大帥國の爲め盡

韓愈は入る
へきや否や

韓愈聲を勵
し庭湊に何
と云ひしや

韓愈京兆の
尹とありし
ときは如何

したる血衣猶あり此の軍何にぞ朝廷に負かん然るに目
して賊とせらるゝこと奇怪に堪へず愈曰汝が曹なをよ
く先大師を記せば則よしと夫より順逆禍福の跡を挙げ
て以ちて之を曉しけきは庭湊衆心の動かんことを恐る
之を麾きて出でしめ愈に向ひて曰侍郎の來る何をかな
さんと欲するや愈答へて曰神策の諸將牛元翼の如きも
の少からず但し朝廷大體を顧みて之を棄つべからずと
庭湊然らば速に深州の圍を解きて牛元翼を出すべしと
て頓て酒宴を設けて愈を款待し禮して之を歸しけり未
幾ならずして元翼圍を奪ひて出づ後愈京兆の尹となり
しと六軍敢法を犯さざりしといふ

(格言) 人の氣ハ須らく是剛なるべし剛ならざれ

ば則義理を擔當すること能はず。(世範)

(教授要旨)

- (一) 事に臨みては堅く志を執り決して動くべからざることを。
- (二) 威のために屈せず利のためは迷はず直前進行して其の行を遂ぐべきこと。
- (三) 氣力剛健なれば能く百難を排して大業を成就しうべしと雖も志薄弱ある人は何事も成し得ざることを。

(教授方法)

願ひなく又恐れなき心あらば、

虎さへ爪をおくところなし。

といへる歌意の如く人は誠心誠意剛毅武勇の心を以ちて事を處すれば如何なる難事をも排斥するの易々たるべきことを教授すべし。

(問詞)

- (一) 韓愈の何故に詔のまゝをせずして境に入りたるか

(二) 常人をして、かの殺氣紛々たる館に入らしむれば、果して如何なるべきか。

(三) 愈は、何といひて庭湊を、詰責せしか。

(四) 庭湊の愈を待遇すること、如何。

(五) 愈の使せし効果、如何。

(六) 京兆の尹となりしときの成績、如何。

(書取題案)

(一) □ノ□ハ□ラ□□ナルベシ□ナラザレバ□□□□ヲ□スルコト
□ハズ

(作文題案)

(一) 日本武尊の武勇

(二) 事を成すは剛氣にあり

公 益

江川永脩の幕府の役を務めしや

(例話)

江川永脩は遠州濱松の士族なり、始め幕府の陸軍鎮撫頭取となり、能く其の職掌を勤めたり、己巳の年徳川氏駿河に轉封の時移りて沼津に居る、そより傍近の壯士を集め、大小銃火門の機械を作り直し、火藥製造法を教授し、漸衆庶を引き立てしかば、舊藩知事其の志を感じ若千金を賞與せり、其の後命によりて三方原の大谷に移りしに、この地の百餘戸の小村にして風化及ばず、固陋のもののみ多く、動もすれば法令を誹議しけり、茲に於きて永脩自鋤鋤をとりて、不毛を開拓し、荒畑を脩め、茶園を設け、又貧しきものに資財を貸與して其の業に就かしめ、或自費を以ちて道路を脩繕し、行人に便せしむ、是等の盡力人のなすがたき所なるにより、縣令より金二千疋、農

三方原の大谷より永脩の如何なることをおしむ

具を添へて下賜せらるたり。

(格言) 農夫商估工丁は、物産を増して國益をなし、
學士識者は、衆庶の智を啓きて國益をなす
べし。(勸善訓等)

(教授要旨)

- (一) 己の利益を計るのみならず、公共の利益を計るゝ人の義務なること。
- (二) 人々自分の利益をのみ計りて公益を計ることなければ、世間の改良進歩得て望むべからざること。
- (三) 人々皆公益をなし得ざるゝあきこと、即農工商賈は、各其の職業を改良進歩して以ちて公益を計るべく、學士識者の社會の道德を進み智識を増して以ちて世益を計るべきこと。
- (四) 公益を計れば、自家の不利益とある場合あり、然れども其の利益の大にして且廣きと思へば、一身の細利は省みるに足らざること。

(教授方法)

公益とは國家公衆の利益といへる義よりして、即學術を研きて種々の發明工大をなし、或殖産興業の道を廣め、世を益し國を利し以ちて人生の福祉を増進せしむるなどの解釋より事實に入り格言に歸納すべし。

(問詞)

- (一) 永脩が起したる利益を擧ぐべし。
- (二) 永脩が移り住みてより後、大谷の地は、如何なる有様となりしか。

(應用問詞)

- (一) 人の起し得べき公益の種類を、列擧すべし。

(書取題案)

- (一) 格言を口誦して書取らしむべし

(作文題案)

- (一) 岡本嘉藏の公益
- (二) 公益

(三) 道路開鑿協議の書翰

節 儉

細川重賢の城主なり、五十万石の大祿を領せし人なほとも清約寡欲として質素を旨とし、勉めて下民の情を察しけり、平生食に味を重ねず、衣服は木綿を用ひ、垢付けは之を洗濯して再服せり、居室も儉陋にして恰常人の居宅の如し、篠倉といふ地に野亭ありたきとも命じて之を毀たしめ、疲るゝ時の草を藉きて休息して可なりといへり、又居城の西南に三層樓あり、眺望尤佳なりしも遂に之を廢せり、又遊獵を喜めども近臣從僕を戒めて麥禾を踏むべからざらしめ、且民家にて茶一杯を

(例話) 越中守細川重賢は熊本の城主なり、五十万石の大祿を領せし人なほとも清約寡欲として質素を旨とし、勉めて下民の情を察しけり、平生食に味を重ねず、衣服は木綿を用ひ、垢付けは之を洗濯して再服せり、居室も儉陋にして恰常人の居宅の如し、篠倉といふ地に野亭ありたきとも命じて之を毀たしめ、疲るゝ時の草を藉きて休息して可なりといへり、又居城の西南に三層樓あり、眺望尤佳なりしも遂に之を廢せり、又遊獵を喜めども近臣從僕を戒めて麥禾を踏むべからざらしめ、且民家にて茶一杯を

國主祭といふ如何

吞むといへども必其の價を償はしむ、又諸役人に命じて、年々一万五千石の年貢を減せしめたるのみならず、下民の利となること知りて行はざるはなし、是に於きて國富み政事整ひ下民悦服せざるなら、人民深く其の德を慕ひ、毎年農事の暇酒を備へて之を祭り、終日歡呼す之を國主祭りと稱せり。

(格言) 奢の一字天下にありては、國天下滅亡の種子なり、一家にありては、一家滅亡の種子なり、一人にありては、一人滅亡の種子なり。

(教授要旨)

(一) 人慾は極めて増長し易きものにして、若之を制することなくんば遂に身を亡し家を滅ぼすに至るべきこと。

- (二) 衣服飲食は實用を旨とし、華美に流れざるやう勉むべきこと。
- (三) 無益ある事に財を費すは不善なれども、有益ある事のためには、少しも吝むことなく、財を用ふべきこと。

(教授方法)

先生徒をして事實と格言とを讀み且講話せしめ、然る後教師其の補足をなし、正面的反面的種々の問を發し勤儉貯蓄の精神を發揮し、其の實踐躬行を勸誘獎勵すべし、猶前々學年より教授し來りたる勤儉節約の事項を之と對照說話せしむべし。

(問詞)

- (一) 重賢の衣食住の狀態を語れ。
- (二) 野亭及三層樓を廢せしは何故なるか。
- (三) 重賢は、如何なる良政を、施さしか。
- (四) 肥後の國富み、政整ひ下民悅服せしは、如何なる徳よりてあるか。
- (五) 國主祭の、何よりて起りしか。

(應用問詞)

- (一) 世に家を興す人と家を滅す人と二種あり、如何なる人は之を興し、如何なる人は之を滅すと思ふぞ。
- (二) 毎月五拾圓の所得ありて、四十圓の支出をあす人と、五拾圓の所得ありて六十圓の支出をあす人とい、數年の後如何なる懸隔を來すべきか。

(三) 塵も積りて山をあすとい如何なる譬喩か。

(書取題案)

- (一) □ノ□□□□□ニアリテハ□□□□□ノ□□ナリ一家○○○○○
- 一家滅亡○種子○○□□○○○○○一人滅亡□□□○

(作文題案)

- (一) 節儉

勤 學

祐宜の資性
如何

(例話)

祐宜は京都眞言宗智積院の沙門なり、俗姓ハ深澤氏下野國に生る、資性弘毅にして大度あり、年十六落髮す、後十年笄を貰ひ、根嶺に至り日秀、賴玄等の諸老徳に就きて密義を習ふ、又支那に遊びて大に經義を究む、往く所寸陰を惜み夜以て晷に繼ぐ、此の如きもの二十五年慶長九年敕して僧正を授けらる、祐宜毎に徒弟に諭して曰、學は勤苦に精しく行ひ脩鍊に成る、必しも點慧にあらず、我素性魯鈍なり、少時郷にあり講席に至る毎に儕輩の屈する所となる、一日我が父屈するを聞き、大に怒りて曰、生きて屈辱を受くるより早く死するに如かずと、刃を持して逐へる、我避けて之を脱る此より益々刻苦懈らず、根嶺より歸るに及びて、前に吾を屈せしもの皆來りて誨を

祐宜父に逐はれしや
何れに後如

受くるに至れり、稽古の力豈大ならずや、汝等それ施を勉めよと。

(格言) 劍利なりと雖、礪かざれば斷ぜず、材美あり

と雖、學ばざれば高からず。(雜詩外傳)

(教授要旨)

- (一) 人の心は、もろく、易に動かされるものにして、如何なる事をもなしうべき能力あるものなれども、之を自然に放任して琢かざれば、鑽研がざる利劍の如く、磨かざる美玉の如く、物の用に立たざること。
- (二) 人心を研磨するの法は、只學を研磨して、事物の道理を、明らむるにあること。
- (三) 人の天稟の才各同じからず、然れども、たとひ天才あるの士も、學問を勤むるにあらざれば、決して十分の働きを成すこと能はざること。
- (四) 性質遲鈍なる人と雖、學問を修むれば、十分なる才徳を養成し得べく、

従ひて人の上流に立ちうべきこと。

(教授方法)

演繹的に教授すべし。

(問詞)

- (一) 祐宜の素性及其の修學の經歷を、概述せよ。
- (二) 祐宜が、其の「徒弟」に諭したる大要を語れ。
- (三) 祐宜、始め人のために輕侮せられ、後敬重せられしは、何故ぞ。

遵法

正輔の人となり
を語れ

(例話)

筑前國宗像郡武丸村に正輔といへる農夫あり、人となり忠厚にして、他人の緩急あれば往きて之を救ふこと己の事よりも甚し、初寒暑雨の時國の徭役あれば人情難める色あり、正輔毎に自代らんことを請ひ、曰、艸野の賤

民國恩の萬一を報ゆるは唯この一事あるのみと、享保年間大風あり、筑前殊に甚しく稻苗盡枯る、秋に及びて國中一毛なきは、獨正輔の田のみ豊熟したり、正輔大に悦び、悉之を國中に分配して、穀種とさしめたりとぞ。

(格言)

賦を輸し、役に應じ、力を勉め、事に従ふ、義の

當に然るべき所、若人に先つ能はざるも、必

時より後るべからず。(張鶴園集)

(教授要旨)

- (一) 人民は、常に國の法度を遵守し、決して之に違背をべからざること。
- (二) 租税は、よりて以て國用を支ふる所なれば、滞ることなく之を納めざるべからざること。
- (三) 若事ありて徭役を命ぜらるゝ時は、進みて役に服すべきこと。

(教授方法)

國家に對する第一の義務は、法律規則に服従することなり、國の法律規則に國人多數の安寧と幸福とを、希圖するを以ちて、目的とし制定せられたるものなれば、如何に我一人其の不便不利なることを感ずるも、決して違背すべからざるの定理より、事實と格言とを以ちて、之を銘肝せしむべし。

(問詞)

- (一) 正輔の性行、如何。
- (二) 正輔が、他人に代りてまで、徭役を服せしは、何故なるか。
- (三) 凶年のとき、正輔の如何ある事を、なましど。

(書取題案)

- (一) □ナ□シ役○應○□ナ□メ事○從○□ノ□ニ然○○○所□□ニ□ッ能○○○○□□ニ後○○○○○

(作文題案)

- (一) 租税は何の爲に上納すべきか

尊 王

(例話)

稱徳天皇の御時に弓削道鏡なるものあり、頗天皇の寵を受け勢朝廷を傾く、時、太宰の主神習宜阿曾麻呂なるもの、道鏡に阿諛し、八幡大神の託宣なりとて矯り奏して曰、道鏡をして天位に就かしめば天下太平ならんと、天皇惑ひ給ひ和氣清麻呂を遣して神教を請はしむ、發するに臨み、道鏡清麻呂を召し目を瞋らし劍を按して曰、汝宇佐に至りて神勅を奉じ我をして志を得しめば、汝を以ちて大政大臣となさん、苟否らずんば立どころに嚴刑に處せんと、路豊永なるものあり、清麻呂に謂ひて曰、道鏡も

阿曾麻呂は
何と矯り奏
せしや

從へば則ち
華極まりな
く從はざれ

ば則嚴刑
を施さず清
麻呂果して
心を動かす
べからず

し志を得ば余伯夷に從ひて遊ばんのみと、清麻呂死を誓ひて往く、既に歸りて神敕を奏して曰、我が國君臣の分定きり、天日嗣は必皇胤を立て、無道の人へ速に誅戮を加ふべしと、道鏡大に怒り、清麻呂の官位を褫ひ、名を穢麻呂と改め大隅に流す、竊に人を遣ひて殺さしめんとす、會々激雷大雨に妨けられて果す能はず、參議藤原百川其の忠烈を憫み封を割きて之に給與す、光仁天皇即位せらるゝに及び、道鏡を下野に竄じ、清麻呂を召還して本官に復せらる。

(格言) 天祖の神詔を、皇孫に授けたまひし時より、我

が國君臣の大道、既に明なり。(合澤、安)

(教授要旨)

- (一) 我が皇統は萬世一系にして、全世界絶えて比類なきこと。
- (二) 天祖天照大御神、神器を天孫に授け給ひし時、皇基此に定り君臣の大道、確立せしこと。
- (三) 寶祚の隆なること、天壤と異なりなきこと。
- (四) 我が國の強盛ある所以は、全く一系の皇統を奉戴することによること。
- (五) 我が忠良なる國民は、固より非望を擽くが如きことなしといへども、假りに之ありとすれば、大逆無道なること。
- (六) 我が皇室の尊榮は、帝國の隆昌臣民の幸福と全く一致するものなれば、吾々臣民たるものは、益々尊王の心を發揮し、以ちて國運を進め民福を増さんことを勉めざるべからざること。

(教授方法)

國家は主宰あるは恰一家に主人あるが如し、數萬の人民聚合体の上に立ちて、之を統御し之を保護し給ふは、萬世一系の君にましまして、之を恭敬し之に服従するは、國中に生存する人民の義務なることより、皇室

の爲にば、一身一家を棄て盡さるべからざることを訓諭をべし。

(問詞)

- (一) 道鏡の勢威、如何。
- (二) 阿曾麻呂なるもの、如何なることを奏上したるか。
- (三) 清麻呂發途の前道鏡如何なることを、清麻呂に告げしか。
- (四) 清麻呂發途の時の決心、如何。
- (五) 清麻呂が、歸りて奏上したる神話を、詳述せよ。
- (六) 清麻呂ために如何なる事とありしや、又若初め道鏡の意に従ひたらんは、如何なる事となるべかりしや。
- (七) 百川、如何ある事をなましか。
- (八) 最後清麻呂及道鏡は、何となりしか。

(應用問詞)

- (一) 此の時もし清麻呂をしてあらざらしめば、如何に怖るべき事を、現出したるべきや。

(二) 此の話に付きて、最深く感動したる所を、語るべし。

(書取題案)

- (一) □□ノ□□ナ皇孫○授○○○○□ヨリ□が□□□ノ□□既○明○○

(作文題案)

- (一) 天皇陛下御通輩を拜する心得
- (二) 天長節
- (三) 地久節に人を招く書牘

報 恩

(例話)

大浦熊吉は下總國關宿の人なり、性敦厚眞實なり、久世大和守の姑敬眞院召して公子秀之助の傳となす、常に公子に従ひて武技を學ぶ、幕府亡びて秀之助彰義隊に

大浦熊吉の
人となり如
何

熊吉之を如何にすと思ふか

入り官軍と戦ひて死す、熊吉其の屍を路傍に埋め歸りて之を敬眞院に告ぐ、敬眞院深く其の忠厚に感ず、後復東京に來り、多年の間處々一流寓し、備に艱楚を嘗む、未嘗片時も舊君を忘れず、後麴町區石黒某を主とす、一日主用を帯びて外に出づ、路に敬眞院が零落して市に乞ふを見、大に驚き伴ひ歸りて實を主人に語り、資金を借りて家を柳原に求め、敬眞院と共に居り、晝は早天に起きて蛤蜊を市中に賣り、夜は歸りて魚を店頭で賣る、熊吉が忠實の譽甚高きを以ちて花客頗多し、數年ならずして財を貯へ、亡君の墳墓を戦地に築き、追遠の意を表せり、時に明治十三年五月甲辰、戦死を去る十三年なり。

〔格言〕 恩は報ずるは人道の大節なり、禽獸ハ恩を

知らず、恩を知るを以ちて人とする。〔貞原益軒〕

〔教授要旨〕

- (一) 人より受けたる恩は、必報いざるべからず、恩を報ゆることを知らざるものは、禽獸に均しきこと。
- (二) 一飯の徳も必報せざるべからず、まして主従恩顧の關係あるものは、尤心を盡して報いざるべからざることを。

〔教授方法〕

恩を知らざる人には、忠孝なし。

恩を仇、かばちや垣根を、ぶちたふし。

之等の卑近なることより説き起し、人より恩を受けたる時、必之を忘るべからず、恩を受けて忘るゝものは、木石より比しかるべきことを教授すべし。

〔問詞〕

- (一) 熊吉は何處の人にして、何人に事へしか。
- (二) 秀之助戦死せしとき、熊吉如何なることをなましか。
- (三) 舊主の零落せるを見て、如何にせしぞ。
- (四) 如何にして舊主を養ひたるか。
- (五) 亡君の墳墓を立てしは如何なる意ぞ。

友愛

(例話) 會津耶麻郡上林村に小左衛門清右衛門と稱する兄弟あり、兄年七十一男子二人孫四人あり、弟年五十九男子一人孫三人あり、其の外親族すべて十七人一家に住し、兒女何れの婦にも親の如くなづき、婦もまた何きの兒をも子の如く愛し、一家心の隔てなく暮しけり、或る時兄弟相語りて曰、吾等存生中の一家に住して睦しく暮すと

汝等かく數
多の家族あ
る家を見た
るか

兄家ある
とき如何
にか

も、なき後は家族の心移り別居を望まんも知るべからずとて、其の隣地に一家を造り兄弟別に住みよりけり、然るに何きもみな別居すること哀みければ、復もとの如く一家に住せり、弟、孫子を率ゐて、田畝に行けば、兄の家を守り、其の歸り來らん時足あらふべき湯を設け、寒き時の火をたきて是を待つ、又人の響應に招かるゝ時、兄ははとなりとも弟を思ひしめんとて、之に行くことを勸むは、弟は固く譲りて兄をして往らしめ、己は家業を勤めて懈らず、兄はまた肴の類を携へ歸りて、弟并び孫子に與ふるを常とせり、又市に出で、珍しき物あれば之を買ひ來りて子供に與ふ、其の一家の睦しきこと言葉に盡しがたし、左れば村中のもの皆其の徳を信し、争ひ事などあれば、

兄弟二人其
の善行を賞
せられしは
何年か

二人の中裁を請ふに、よく治らずといふことなり、元禄二年の秋、兄弟とも米若干を賜りて、其の善行を賞せらるたり。

(格言) 兄弟は同胞の親、父母に次ぎたる天倫なり、

其の親、久しきを樂むべし。(貞原篤信)

(教授要旨)

- (一) 兄弟は、同じ父母より出でたるものとして、其の親實又父母に次ぐものなれば互に相親愛せざるべからざること。
- (二) 平日は互に和親して共に其の幸福を樂しみ、一旦事あるときは互に相助け吉凶禍福相俱にすべきこと。
- (三) 世間往々些細なることよりして兄弟中違ひすることあり、淺ましき限りといふべし、骨肉の親大なるを思ひ、些細の事を心に介すべからざること。

(四) 兄弟友愛の情篤ければ、諸婦も亦相親しみ、叔姪も亦相睦み、一家族の和樂計るべからざること。

(教授方法)

兄は弟を愛し、弟は兄を敬すべし、兄弟は恰十指の相重りたるが如きものにて、互に相助け相益し、生涯苦樂を俱ふせざるべからず、然るも他人に親み、兄弟の間不和となる如きは、悖徳の最甚しきものと云ふべし、故に兄弟は小左衛門、清右衛門の如く、常に親み睦しくすべきことを、反問難詰して克く銘肝せしむべし。

(問詞)

- (一) 小左衛門一家には、如何なる人々幾許人住みたるか。
- (二) 諸婦の間に争ひはなかりしや、又諸の兒女と諸婦との關係は、如何なりしか。
- (三) 兄弟一時別居したるは、何故なりや、尋ぎて又素の如く同居に復したるは、何故なるぞ。
- (四) 弟、田畝に出づるときは、兄家にありて、如何なるとをなすか。

(五) 他人より饗應に招かるゝとき、兄弟相譲りたることを語れ。

(六) 一村のもの如何よこの兄弟を、信重し居たるか。

(應用問詞)

(一) 汝等家より兄弟あり、汝たまゝ他人の家まで珍しき物を貰ひたりとせば、之を如何にするか。

(書取題案)

左の句を口誦して書取らしむべし

(一) 兄弟は同胞の親父母に次ぎたる天倫なり其の親久しきを樂むべし

(二) 常に兄弟相勞りて兄が田野に出づるときは弟は家を守りけり

(作文題案)

(一) 兄弟姉妹の間柄

(二) 姉の病氣を尋ねる書牘

(三) 弟を勉學の爲手許によびよする書牘

(四) 弟妹の兄弟に對する心得

剛毅

魚屋助左衛門の天性如

(例話)

魚屋助左衛門は和泉國堺の豪商なり、天性勇敢として豪邁なり、家世々外國と交易し資産頗富む、天正年間天下麻の如く亂れ、英雄四方に割居し、爭亂絶ゆる時なり、助左衛門謂へらく斯る亂世に當り徒に内國にありて、強大なるもの制馭を受けんより、寧ろ外國に航し大に爲す所あるに如かずと、乃鳥合の衆百餘人を率ゐ、兵器を船に積み海に航して呂宋を攻む、呂宋の兵支ふるに能はず、國王使者を遣り來りて和議を請ひ、贈るに寶器及數多の物産を以ちてす、助左衛門其の請を許し、贈物を携へて歸朝す、時に文祿三年七月なり、是より自呂宋助左衛門と

魚屋助左衛門の歸朝の何月か

稱し、威遠近に震ひ富亦前日より倍す、其の名を知らざるものなきに至れり。

(格言) 男兒は務めて氣象を盛にし、人に及ばざることを甘ずるふと勿れ、氣象は萬能の基なり。(林友直)

(教授要旨)

- (一) 甘じて人の下流より立ち、人に屈服するを恥ぢとせざるものは其の人は卑屈にして到底何事をも成し得ざることを。
- (二) 男子一旦志を立て發奮して事に當らば、如何なる事をも成就し得られざるはなきこと。
- (三) 凡事の成し難きは障礙物あるが故なり、即崎嶇艱難あるが故あり、此の障礙物に打ち勝つものは氣象なり、氣象だに盛ならば如何なる崎嶇艱難をも排斥して、目的の地に達しうべきこと。

(教授方法)

男子の此の世に處し、一身を立て一家を興し、之を維持し、之を持続するには、千挫不屈、百折不撓の精神と、剛毅武勇の氣象とに依らざれば、盤根錯節を排斥し、艱難苦楚を凌ぎ、其の志望を全くすること能はざるを、種々引証して以ちて活潑剛毅の精神を發揮養成すべし。

(問詞)

- (一) 助左衛門の身分は如何。
- (二) 當時天下の有様は、如何なりしか。
- (三) 助左衛門は、如何ある志を擁して、遠征を企てしか。
- (四) 遠征の結果、如何。

(應用問詞)

- (一) 吾々の如く、太平の御世に生れたるものは、如何なることを為すべきか。
- (二) 汝等讀書に於きて、或物理、數學等に於きて、極めて解しがたきものに會は、如何にせんとするぞ。
- (三) 真正の才智は、剛毅の志向なり、とは如何。

(四) 凡、人事業を成就するには、剛毅なる心志の力を以ちて、基礎となす、との意味を説け。

(書取題案)

(一) □□ハ□メテ□□ナ□ニシ人○及○○○○○○○廿○○○○○□レ氣象○□□ノ□ナリ

(作文題案)

- (一) 剛毅
- (二) 男子の氣象
- (三) 性質柔弱なる朋友を奮勵する書牘
- (四) 震災の爲に一家没落し憂鬱に陥りし朋友の氣象を興奮する書牘

高等修身教科書 高等第一、二年級 用畢

K121.1

明治廿五年五月十九日印刷
明治廿五年五月三十日出版

正價金拾五錢

著 者 岡村増太郎

發行兼 印刷者 大橋新太郎

日本橋區本石町三丁目拾六番地

東京日本橋區本石町三丁目拾六番地

版權公録



版權所有

發兌元博文館

幸福散史澁江保君譯

處世活法

全一冊美本
實價廿五錢
郵税三錢

此書は英人マッシー氏の原著にして人間處世の要
道を詳述し自家の精神事業の成功幸福の運否に關し
て獨一無二の卓見を具へるも亦平易の流暢なれば
原意の足る所の爲より一家の經濟に於て一明瞭
精に當るの精神意匠行爲より誠に人生重寶の好書なり

幸福散史澁江保君譯

福之神

全一冊美本
實價廿五錢
郵税三錢

本書は英人ブラット氏の原著マッシー氏を譯したる
の也金銭の社會上及び一個人に於ける勢力關及
利成功の經濟論を詳論せざるものすべく其小なる
ば事業の成功の格實例益々増進の秘訣と稱する
處々金の玉の格實例益々増進の秘訣と稱する
てんも人には最も上の寶典たるべし其文章は通俗
何人にと雖も能高尙なる趣旨を解得するに足る

幸福散史澁江保君著

方處針世幸福要訣

全一冊美本
實價廿五錢
郵税三錢

人生の目的は幸福にありとハズメン氏が千古の金
言洋の東西時を問はず男女老若貧富皆然
苦を辭せざる所の如く是れ各人皆其の欲する所を達する
同なることを其の如く是れ各人皆其の欲する所を達する
きを期すべからざる如く是れ各人皆其の欲する所を達する
には如何せん可なるか是れ此書の詳に教ゆる所なり
苦の幸福を全ふするの道を究めよ

萩野由之先生著 寺崎廣業密書

朝野年中行事

全一冊美本
實價廿五錢
郵税三錢

本書は朝廷の諸儀式より現今民間に行ふ儀節
を悉くとり集め一年十二月に類別して其儀節の沿革
を記したるものなり凡民間の儀式など書せるもの
に其儀節一般を伺ふを得べし其要領を本邦の儀式を
んもの必ず坐右に供ふべき良書なり

